廻る貴方と―――

Gloria

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
廻る貴方と―――

【Ｎコード】
Ｎ２９２０Ｉ

【作者名】
Ｇｌｏｒｉａ

【あらすじ】
彼女・・・美月が愛した人は、戦争で死んだ。
彼女は心の痛みに耐え切れず、忌み嫌っていた完全記憶能力を使うことを決意する。
家族も同然に生きてきた中で色褪せずに覚えている
彼の言葉を、行動を、性格を、体格を―――彼女は再現する。
そんなＰＣの前で倒れるまで作業をして

入院を繰り返す彼女の周りにも変化が訪れた・・・。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ・・・（前書き）

初投稿です。Ｇｌｏｒｉａ（グロリア）と申します。
『廻る貴方と―――』という題目で始めさせて頂きます。―'ω'；
―

ジャンルが『ＳＦ』なのですが・・・。
後半から『ファンタジー』要素が増えてくる予定（笑）です。
強いて言うなれば数部に渡って書く予定です。
近未来の１部　１部から時が経った２部・・・という形でしょうか？

リアルの都合で四苦八苦した毎日ですので月２～３を
目標とした、まったり更新になりますが良ければ読んでやってくだ
さいなー・・・！

Prologue・・・

廻る・・・貴方（貴女）と――――――――

カタカタッカタタタタッカタタタタッカタカタ・・・。
暗い部屋に響く音はキーボードのタイプ音。暗い部屋には２０代の女性と、彼女が操作するデスクトップ型のＰＣにディスプレイが２つ。

彼女は時折、片方のディスプレイを思い出したように確認しながら、もう片方のディスプレイを見つめている。
片方のディスプレイを確認しながらも、彼女はとりつかれたように一心不乱に手を動かす。

彼女が見つめるディスプレイにも文字列が表示されている。・・・所謂、プログラムである。
思い出したように確認するディスプレイには、滝が逆流するような速度で文字列が表示されている。

滝のように流れるディスプレイに明滅するように現れては消えていくのは、
マシンコード、バイナリコード、オブジェクトコード、バイトコードなどの機械語（マシン・リーダブル）。

もう片方の彼女が一心不乱に作成しているのは、コードやプログラムリストと
呼ばれることもあるソースコードで、人間が読み書きすることを前提とした形式。（ヒューマン・リーダブル）

たまに様子を見に来る名前ばかりの助手が、入り口から心配そうにしている。
彼女はそのままにしておくと、飲まず食わずで意識が無くなるまで作業を続けるのだ。

作業を続ける彼女の名は高柳（タカヤナギ）　美月（ミズキ）
助手の名前はリーク・ターナーという。

「失礼します・・・コーヒーを淹れました」

「そう、ありがとう」

「・・・そろそろ本日の作業を開始されてから、９時間が経過しました」

「そうね」

「いい加減に休憩を入れてください！」

「分かったわ」

「・・・3時間前も同じ事を言ってましたが」

助手はいつものことだと嘆息しながら、今日も説得を試みる。
いつものように3分間の説得。最近、リークのライフスタイルに追加されたモノがある。
それは、彼女を3分説得することだった。

何故、3分なのか。
・・・簡単に纏めるならば、どれだけ熱意を籠めようが意味がないのだ・・・。
助手であるリークが冗談半分でラブコールを送ろうが、罵詈雑言を喚き立てようが流されるだけなのだ。
故の3分。・・・長すぎると流石にミズキに嫌われるという心配を含めた活動限界である。

実際のところ――――――――彼女の心は、数年前から凍っているのだが。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――

私は貴方が好きだった。

無愛想で、朴念仁で、頭の中は趣味と仕事ばっかりだけど、優しかった貴方が・・・。

小さい頃から何度、決意を固めただろうか。

その度に気がついて貰えなかった私は道化（ピエロ）だろうか？

最期まで・・・受け容れてはくれなかったね――――――

でも、一人ぼっちな私を”家族みたいに”誰よりも優しくしてくれたね――――――

だから、私は・・・貴方が死ぬのに耐えられない。

だから、貴方は死ぬけど。私が消えるのを”許可”しない。

その行為が貴方に、両親に、周囲の人達に、

世界中の人達から『異端者』や『異常者』と呼ばれたとしても。

だから、貴方は消えちゃダメ――――――――

Prologue・・・（後書き）

ック・・・なんというかですね。
他の小説家さんって凄いですね―'∀'；―

私は理系なので読むことはあっても小説を書く事とは無縁でした・
x・；

小説を書くってことの難しさの片鱗を味わった気がします。
毎週楽しみに読んでる週刊誌の漫画家さんの大変さを考えると・・・
ガクガク

小説家になろうのサイトは、大好きな作家さんを探してるうちに発
見しました（汗
どこまで続くのか分かりませんが自分に出来るところまで頑張りた
いと思います三―'ω'―ノシ

#1　リーク＝ターナー（前書き）

えっ、Ｐｒｏｌｏｇｕｅ．．．の続きじゃないの？―'ω'；―！？
はい、登場人物の紹介って訳じゃないんですがリークから・・・。

主人公はリークかって？違いますよ（笑

#1　リーク＝ターナー

当初、彼は突然の異動に不満を隠せなかった。
開発部で革新的なコンセプトを秘めた計画を提案して数日での異動である。

（むぅ、考えられるのは開発案《AXシリーズ》ぐらいしかない・・・。とすれば・・・頭の固い派閥の地雷でも踏みましたかね？）

「はぁ・・・移動先の”上司様”はどんな人なんでしょうかねぇ」
口調が丁寧な癖に、たっぷりと皮肉が籠められていた。

「おっ・・・これはこれは”栄転”されるリーク殿じゃないですか！」
嬉しそうに顔をニヤニヤさせながら近づいてくる元同僚。

「失礼・・・・・・ぇーと・・・ボ・・・ボスニア」

「ボースだっ！！」

「・・・失礼しましたボオズ」
分かりやすいように口をはっきりと3段階に変化させて名を呼んだ。
ボ・オ・ズ・・・と。

「貴様は・・・人を怒らせる才能に特化してるようだな・・・？」

「いえいえ・・・いつも怒ってましたので、どこぞの紛争地域かと・・・。」

「貴様が居なければ血圧も上がらんわ・・・ッ！！」

「そうキリキリしないでください、ハゲますよボース？」

「・・・・・・・・・・もういい、ところで”栄転”らしいな？」

「異動です」

「ハッ・・・まぁ・・・上は余程、貴様の斬新な提案が気に入ったんだろうよ。お前が使う筈の予算は代わりに俺が使ってやるよ」

リークは顔を顰めると、悩むようにして言った。
「そうですか、そうなると予算の無駄遣いが深刻になりそうですね・・・。」

「ック・・・まぁ、魔女に食われないように気をつけるんだな！」

「負け惜しみを逃げ台詞にすると、出落ちキャラで定着しますよ？」

「余計なお世話だ・・・ッ！」

「あぁ、あんな目立つ部分に円形脱毛症が・・・可哀想に・・・。」
リークは最後の最後までこんな調子だった。

（・・・はて、魔女とか言いましたか？）

「魔女・・・中世ヨーロッパじゃあるまいし・・・。」
リークは呟くと資料を捲ってみる。・・・やっぱり気になるものは気になるのである。

「ちょっ・・・凄い美人じゃないですか！」
資料にあった写真を見てリークは小躍りした。写真の中の女性は、

長い黒髪を掻き揚げカメラに向かって微笑んでいる。

（こんな美女となら一生を添い遂げても良いですね・・・）

「年齢は２０歳・・・若いですね。当然ですが独身っと・・・。」
どこから取り出したのかメモまで取っている。

（異動は残念ですが、ある意味として墓場入りかもしれません・・・
ふふふっ）

――――――――そんな甘い妄想は初日から音を立てて崩れ去ったが。

彼が彼女の下に異動になって半年ぐらいだろうか？

最初の頃は、一心不乱に作業する上司に驚き尊敬したが、結局は慣れである。
彼の上司は線が細く、可愛らしいというよりは人形のような美しさ

があるのに、手入れをしないのである。

・・・まったくというか、何一つとして。

つまり、資料で見た写真の中の微笑む美女は居なかったのである。
当然、初日のリークは落ち込んだ。

（こんな筈では・・・ッ、私の計画に狂いは無かった・・・ッ！）

リークは何度も上層部へ問い合わせた。
リークは現実を拒否するために、周囲の人に尋ねて尋ねて尋ねまくった。

初日のリークが遭遇したのは、暗い部屋に一心不乱にタイプ音を響かせる２０代の女性の姿だった。
挨拶をしても返事を返さず、立ったまま２０分が経過しても状況の変化は無い。

意を決して声をかけると・・・

「聞こえてる。五月蝿い、邪魔・・・っていうか一人でやれるから」
少し高めのソプラノが返ってきた。嬉しくなったリークは、もう一度声をかけた。

「本日付で配属になりました。リーク＝ターナーです。」

「そう・・・私だけで手は足りるから、あなたは要らない」
挨拶から返ってきたのは拒絶の言葉。

「と申されましても、私も上からの指示ですので・・・。」
リークはめげなかった。

「・・・勝手にして」

「部屋の照明付けますよ？・・・あれ、つかない？？」

「照明ならつかない、要らないから配線を変えた」

「そ、そうですか・・・あの、ミス・・・？」

「五月蝿い、作業の邪魔」

「なんと呼べば良いでしょうか？」

「・・・名前でも苗字でも好きな方で呼んで構わない」

リークは顔を輝かせるように微笑んで、愛おしそうに名を呼んだ。
「はい、これからよろしくお願いしますね。・・・ミズキ」

「やっぱり名前で呼ばないで。・・・なんていうかキモい。」

「キ、キモッ・・・！？」

「後、階級は私の方が当然上だから。・・・リークは邪魔しないで。」

「失礼ですが、ミズキ・・・私も開発部出身ですし役に立てると思います」

「自意識過剰、っていうか名前で呼ぶな。・・・リークの専攻が何か知らないけど、これは私が終わらせなければいけない使命だから。」

「使命・・・ですか」

「そう・・・だからリークの仕事は身の回りの世話・・・ぐらい？」

（身の回りの世話・・・だと！？し、下着姿とかお風呂での裸の付き合いとか・・・ッ！！ダメだ。私は紳士、私は紳士・・・そうだ・・・落ち着け、冷静に何を喋るのか考えろ・・・フラグを立てろッ！！）

「・・・身の回りの世話ですか？」

・・・何をやらせる気だ！とドキドキワクワクしながらも、顔を顰めミズキに質問を返す。

ここの『何をやらせる気だ！』の部分は口調では落ち着いているが、実際のところ舞い上がるような気持ちのリークである。

「そう、洗濯だけは自分でやるから他のことをお願い」

（うがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁ！！・・・洗濯はダメだとッ！？返せ・・・ッ、私の胸のトキメキを・・・！！私の期待を返せぇぇぇぇ！！！）

「わ、分かりました」

こうしてリーク＝ターナーの執事のような助手生活が始まったのであった・・・。

#1　リーク＝ターナー（後書き）

リークは紳士です。
極めて紳士です。・・・誰がなんと言おうと紳士（笑）です。
例え、変態だとしても変態という名前の紳士です。

”主人公達”の登場は次話ぐらいには・・・間に合わせます！（タブン
次の更新は暇が出来次第・・・って事で今週中にもう1話作れるかな・・・？
取りあえず頑張ってみます。x。

#2　ミズキ＝タカヤナギ（前書き）

今回はミズキ視点からになります・x・

#2　ミズキ＝タカヤナギ

部屋に光が入ってきた。
誰かが部屋のドアを開けたようだ。

（部屋・・・暗いほうがやりやすいのにな）

突然の訪問者は入ってくるなり名乗りだした。

「本日付でミズキ＝タカヤナギ女史の下へ配属となりました。リーク＝ターナーと申します！」

（新人・・・？）
耳から入ってくる情報だけでは良く分からない。
・・・といっても、無視を続けて暫くすれば消えるだろう。

「ほ、本日付でミズキ＝タカヤナギ女史の下へ配属となりました。リーク＝ターナーと申します！」

（・・・しつこい――）
この男は、なんで私に声をかけるのか。
・・・そういえば2～3日前に誰だかが配属されるとか聞いた気がする。

（放っておくのも可哀想か・・・ここが終わったら声をかけてあげよう）
基本的にミズキは世話焼きである。・・・愛する彼を失ってからは、その世話焼きも見られなくなったが。

何分が経過しただろう・・・リークは２０分程待ちながらも、返事が返ってこないことに泣きそうになった。

「本日付でミズキ＝タカヤナギ女史の下へ配属となりました。リーク＝ターナーと申します！」
意を決したリークが再度、呼びかける。

（ん・・・誰か居る？・・・あっ、やだ・・・忘れてた！？）
・・・といっても、今更になって誤るのは・・・なんか嫌だ。負けた気がする。

（・・・っていうか、この人って五月蝿くない？無視しておいて言えたことじゃないけど邪魔かも？）

「聞こえてる。五月蝿い、邪魔・・・っていうか一人でやれるから」
口から出たのは、こんな言葉だった。

「本日付で配属になりました。リーク＝ターナーです。」

それでもリーク＝ターナーとやらは声をかけてくる。

「そう・・・私だけで手は足りるから、あなたは要らない」

「と申されましても、私も上からの指示ですので・・・。」
しつこい・・・どこまでも食い下がってくるようだ。

（なんで、放っておいてくれないの？作業が遅れるじゃない・・・
私の邪魔をする人なんて滅べば良いんだわ）

「・・・勝手にして」
諦めたミズキは作業を進めることにした。

（待っててね・・・1秒でも早く、貴方を”創って”あげる。私だけの・・・貴方）
ミズキの頭の中は単純明快で、一色に塗りつぶされている。・・・
それは歪んだ愛だった。

病的とも言える気迫で作業を進めるミズキにリークは質問を繰り返すが、ミズキの怒りのボルテージは増していくばかりである。

リークが仕事が欲しいと五月蠅いので、作業を進めながら考える。
（仕事・・・？プログラムは私じゃないと創れない・・・これは”彼の心”だから・・・他の仕事？）

「そう・・・だからリークの仕事は身の回りの世話・・・ぐらい？」
（うん、この部屋も掃除しないと・・・後は御飯とか、時間の管理かなぁ？）

ミズキは視線も合わせぬまま作業を続ける。
リークは度肝を抜かれたような声を上げた。しかも、彼はブツブツと何か言っている・・・正直キモい。

（声からして・・・男の人。やだな・・・面倒事はキライなのに）
仕方が無いとばかりに作業を中断してリークの方を見る。

そこには、金色の短髪を揺らした２０代の青年の姿があった。
顔は・・・美形と呼ばれる類だと思われる。学生時代は女子達から持て囃されたのだろう。自信が満ちている。

”スクール”に通っていた頃に”クラスメイト達”が好きな男子について騒いでいたのが脳裏を過ぎった。
（”トウヤ”も良く騒がれていたわね・・・鬱陶しい雌豚共に。どうせ付き合うつもりがないなら優しくしなければいいのに。あぁ、もう・・・イライラする。）

リークの顔を見ている内に悶々と考え出し、怒り始めたのに気がつかず、空気の読めないリークは嬉しそうに質問を返してきた。

「・・・身の回りの世話ですか？」
・・・何を考えてるのかしら？この人、やっぱり変な人よ。間違い無いわ。

「そう、洗濯だけは自分でやるから他のことをお願い」

（・・・部屋から追い出したら、ちょっと片付けなきゃ。）

流石にベットの上に下着やらが散らかっているのはダメだ。許せない。

（私は、トウヤの為にあるの・・・心も、体も、命も・・・全て。）

知り合って間もない、ちょっと美形で自信のありそうな男に見られて良いものではない。
見られたら・・・”消す”しかない。・・・物理的にも、世間的にも。

そんな物騒な事を考えながらも、ミズキは作業を再開する。

「・・・って事で1回、出て行って」

「・・・分かりました」
物分りが良い。・・・変な人だけど馬鹿じゃないらしい。

――――――30分後

何故かリークは執事服で現れた。

「・・・・・・趣味？」
呆れてミズキは声も出せなくなったが、搾り出すように聞いた。

「いえ、形から始めてみようと思いまして」

「それが、執事服？」

「似合いませんか？」

「似合ってはいると思う。」

「なら、このままということで」

「リーク？」

「はい、なんでしょうか？」

「・・・やっぱり、変態」

「・・・・ガハァ・・・・ッ」
呻き声を出して膝をつくリーク。ミズキの一言が彼の心を砕いたようだ。

（どうしよう・・・コレ、返品出来ないのかな・・・？）
既にミズキの心の中では、変態の烙印を押されたようである。

「ミズキ女史が喜んでくれるのなら、どんな服でも着ます・・・」

「そんなサービスは要らない。・・・良いからコーヒー淹れて来て」

「分かりましたお嬢様」

「・・・ッ！？」
物凄い形相でミズキはリークを睨めつける。

「・・・何か逆鱗に触れることを言いましたか？」

「”お嬢様”は止めて。」

「何かあっ・・・」

「”お嬢様”は止めなさい。止めなかったら、消すわ」

「消す・・・って、穏やかじゃないですね。失礼しました。今後は気をつけます」

「分かれば良い。・・・事情を知らないんだから仕方がないこと。」

「ってことは、いつか話してくれるってことですね？」

「予定は未定。・・・おそらくは無い。・・・私の作ってるプログラムが完成したら、ありえるかもしれない」

「不肖リーク＝ターナー、全身全霊をかけてミズキ＝タカヤナギ女史を応援いたします。」

（・・・案外、馬鹿のほうが扱いやすいかもしれない）

――――――――――――――――――――

――――――――――――

燈哉（トウヤ）・・・待っててね――――――

後・・・もう少しだよ？
私の記憶する知り合ってから１８年間の”貴方”を形に出来るよ？

貴方は・・・気がついたら怒るかな――――――
それとも・・・抱きしめてくれるかな――――――

――――――そんなこと・・・ある訳ないか。

待ち遠しい・・・無理をしてでも、1日でも時間が惜しくて堪らない。

貴方の記憶に、”私”を刷り込ませる事なんてしない――――――そんな事をしなくても”貴方”は私を覚えていてくれると信じているから――――――

貴方が次に目を覚ましたら、一緒に街へ出掛けよう？
今度は、私が貴方の服を探してあげるの・・・。

その時には、あの頃みたいに化粧しちゃおうかな――――――
形だけだったとしても、皆で輪を作って笑いあっていた・・・あの頃みたいにね――――――

#2　ミズキ＝タカヤナギ（後書き）

”主人公”とか言ってた癖に片割れの名前しか出てきませんでした
ｏｒｚ
話を作るのって難しい・・・―'ω'；―

次回は上層部視点になると思いますっ

#3　仕組まれた異動（前書き）

更新が遅れまくってすみません・・・！
また、ぼちぼちと更新していきます・x・

#3　仕組まれた異動

広いとは言えない部屋だった。
棚が或るわけでもなく、机とＰＣと椅子だけがあった。
部屋に居るのは、５０代後半ぐらいの男性と３０代中旬の男性が２人。
５０代の男性が分厚い規格書を読んでいる。そばには承認のための書類一式まで揃っていた。

ーーーーーリーク＝ターナー：新規格《ＡＸシリーズ》

「ははっ・・・これは面白い」

「どうしました？」

「”あの小僧”だ。あの小僧が、また面白い規格を作ろうとしているらしい」

何やら余程、興味を引くような企画書のようだ。

「あの小僧・・・リーク殿ですか？」

「そうだ。リーク＝ターナーだ。・・・あの小僧の頭の中は、おもちゃ箱のようになっているに違いない」

「今度はどんな企画を作ろうとしたんですか？」

「機動兵器だ。・・・おそらく最小クラスのな」

（機動兵器・・・今の世の中にありふれた機動兵器を今更？？）

「機動兵器・・・最小クラスと言うと着用型ですか？」

「着用というよりは改造に近いアイデアだな・・・これは」

（着用型ではない・・・ロボットか？
いや、未来から送られてきたアンドロイドや、未来から来たネコ型じゃあるまいし。）

「おい、そのネタは危ないからそこまでだ」

「頭の中を読まんでください・・・。」

（この上司と居ると、心の休まる時が無いな・・・。）

「休憩でも行って来たらどうかね？疲れたのだろう？」

ニヤリと上司は笑う

「だから、読まんでくださいっ」

「ふむ・・・そういえば、ミズキはまだ遊んどるのか？」

（ミズキ女史・・・はＡＩの開発に夢中だったはずだ。
落ち込んでいた、あの頃からすれば別人のように働いている。）

「新型のＡＩ開発に力を入れているようです」

「進展は？」

「ミズキ女史は完成するまで連絡しませんから・・・。」

「・・・困った娘だ。大尉が死んだのが大きすぎるな」

（また、あの話か・・・この上司も人の子ということか。）

「皮肉にも、大尉の戦死によって戦争は終わりましたけどね・・・。」

「失った戦力は戻らんさ」

「現行で２８％の損害が出ています。結果だけを見れば大勝かと・・・。」

「親としての資格と、大事な家族を失った・・・これは罰なのかもしれんな」

「”タカヤナギ中将”、戦争に戦死は付き物です。誰も彼もが悲しいことが無いわけではありません」

そう、この上司の名前は”タカヤナギ”の名を冠する。
つまり、ミズキ女史の父親である。
タカヤナギ中将の評判は、どちらかと言えば悪評が高い。

ーーーーー曰く、科学に子供を売った男

ーーーーー曰く、人体実験の推奨者・・・等。

そう、この男が元凶である。

実の娘を、養子として育てた息子に才能があれば施設に預けた男。

名を高柳　雅孝《マサタカ＝タカヤナギ》という。

「まぁ良い、この小僧をミズキに預けてみるか」

「中将・・・リーク殿を開発部から抜かすのは難しいかと・・・。」

「何故だ？」

「理由は幾つか、リーク殿は成果を毎回出します。・・・確実に。」

「それは知っておる」

「更に、あと少しで開発顧問になれるこの時期に異動はリーク殿の怒りを買うと思われます。」

「なに、その辺りは丸め込めばよかろう」

リーク＝ターナーの新規格は日の目を浴びる事無く消えるようだ。

「消えんよ。ＡＸシリーズは有効的だ。この規格を作るにはミズキが要るのだよ」

「また、頭の中を読みましたね・・・？」

「誰だって、男のむさ苦しい思考なんて読みたくはない仕方がないのだよ」

「それで、リーク殿の企画には何と・・・」

「単純なことだよ。『兵員の質が悪いなら上げれば良い、死んで減るなら死ななければ良い』」

「そんな馬鹿な話がありますかっ」

（『質を上げれば良い、死ななければ良い』だって？
それが出来ないから、どの国も軍への負担が増えるんだ。馬鹿にし過ぎてる。）

「死体をベースに有機体を分解して再構築、炭素の結合状態を変え

てーーーーー」

サイボーグ、アンドロイド、ロボット・・・どれにも当てはまりにくい機動兵器。
自ら思考し、その場の状況に合わせて作戦を修正し、確実に目標を達成する。

内臓される兵装は、リーク殿が平行して開発を進めているモノで自らが持つ能力を増幅しながら、弾などに効果を付与するものらしい。

（・・・どれも夢物語なような気がするんですがね）

「天才は天才と馬が合うかも知れんぞ」

「また、ミズキ女史を利用するつもりなんですね？」

「なに、自分の娘だ。恨まれることには慣れたよ・・・心は痛むがね」

さらっと、そんな素振りも見せずに言って見せるタカヤナギ中将

「それに、ミズキの開発したＡＩをＡＸシリーズに組み込めばミズキも喜ぶだろう？」

怪しげにタカヤナギ中将の口元が歪んだ。

#3　仕組まれた異動（後書き）

長くなっちゃいました！

これからも突発的に更新するんで生温かく見守ってくださいな・x・

#4　うさぎさんとらいおんさん（前書き）

えっ・・・気まぐれ更新の癖に早かったって？
キノセイデスヨ――――三―'ω'―ノシ

#4　うさぎさんとらいおんさん

「ミズキ女史の下について、もう半年ですか・・・。」

ぼやいたのはリークである。
彼は箒を片手に自室の掃除をしていた。

「そろそろ、ミズキ女史が何を開発しているのか知りたいですね」

そう、リークは半年間・・・掃除と食事、時間のスケジュールだけをしてきた。
当初、リークが期待していたようなドキドキでラブラブでイチャイチャで
アフーンなシーンは無かった。

髪の毛1本程も無かった。なんていうかゼロでした。

（彼女・・・レズという訳じゃないんでしょうが・・・）
（経歴を調べても出てこないんですよねー）

「それに上層部から渡された資料に書いてあるのって、捏造されてる臭いがプンプンするんですよねぇ・・・」

書類の臭いをクンカクンカと嗅ぎ、自虐的な笑みを浮かべた後に苦笑するリーク。

「リーク・・・書類の臭いを嗅いで、何に興奮しているの？」

「興奮するかっ！・・・ってミズキですか」

「リーク、あなたがモテないのは・・・変態だからだと思うの」

さり気無く放った言葉で、害意も無ければ悪意も無い一言だった。故に、リークの心の深い部分に突き刺さった。涙が出そうになるのを堪えるリーク。

「・・・私は紳士ですよ？」

「紳士は書類の臭いなんて嗅がないよ？」

「いえ、確かに嗅いでましたがコレは―――」

「コレは？」

（・・・って見せちゃダメじゃん！極秘資料じゃん！！）
（知られたら消されるんじゃないですか！！？）

そう、極秘資料である。
ミズキのスリーサイズや身長、体重・・・果てにはお気に入りの下着の
色まで書かれている。この資料を作成したヤツは凄いと思う。
どうやって生きて測定する事が出来たのだろうか。

（・・・そういえばスリーサイズって、合ってるんでしょうか？）

ミズキの体をジーっと見つめるリーク。

（脳内アクセレータ　全・開・・・ッ！、目測スキャーーーーーン！！）

（７０・・・７５・・・８０・・・馬鹿な！？まだ上がるだと！！？）
（なんということだッ・・・この資料に書かれたデータより成長している・・・ッ！！）

「ちょっとリーク？なんか嫌な視線を感じるんだけど、その書類に

何が書いてあるの？・・・・なんで、隠すの？」

「ハッ・・・・！？」

（こんなのが書いてあったのを読んだ事実を知られたら――――――消される！？）

「リーク？・・・・その書類、見せて？」

（・・・し、しつこい――――）

――――――３０分後

小さな銀色が虚空を穿つ

カッ――――――カガカッ――――――ガガッカッカッ――――――

壁に突き刺さったのはボルトやネジ、ナット――――――

高振動を与えられ、着弾時の威力を遥かに増した群れだった。

ミズキの手には何一つ握られてはいない。その変わりに、彼女の両手首
にはブレスレットのようなインターフェイスが儚げな光を放っている。

ミズキが何も無い空間に指先を走らせる度に――――――
入力されたコード《アルファベット》が、光の文字となって宙に踊る。
その姿はオーケストラの奏者のようでもあり、指揮者のようでもあった。

「Ｓｈｅ' ｏｌ（シェオル）・・・ロックした熱源の位置をヘッドセットに流して」

Ｓｈｅ' ｏｌ（シェオル）と名付けられた――――ミズキの能力。
本来、彼女が持つ力は完全記憶能力であるが・・・。
Ｓｈｅ' ｏｌは副次的に生み出された力である。

『了解しました。ターゲットを捕捉――――ロックオン。――――Ｓｔａｎｄ ｂｙ Ｒｅａｄｙ』

彼女の完全記憶能力は、便利に見えるが・・・非常に不便な能力だ。

目や耳などから入ってくるデータの波を、脳が処理しきれないからだ。
日常の全てを処理しようとすると精神的に付加が掛かって廃人になるか、寿命を縮めることになる。

そこで、大抵の場合は入ってくるデータの選択を無意識に行うことで対処するのだが、ミズキの場合は事情が違った。目や耳から・・・五感を通して入ってくるデータを処理しなければ、自らの命が一瞬にして消えそうになることが幼少のころから多々あった。

似たような完全記憶能力を持った人達は殆どが脳死か、”授業中”に息絶える事となった。
つまり・・・ミズキのＳｈｅ' ｏｌは、完全記憶能力を補佐する為に発現した能力である。

Ｓｈｅ' ｏｌは五感、周囲の電位差、空気中のガス成分・・・等を数値化し、圧縮してミズキの脳内へ負荷が掛からない程度に、必要な情報だけを選択して流す役割を持っている。

つまり、簡単に纏めると知りたい情報を図書館で調べるときに『この情報が欲しい』と思えば、自分の目の前に情報に関する本と、そのページが、要約された上で現れるのである。

何も無い筈の虚空から、今度は工具の類までもが転送された。

「・・・Ｆｉｒｅ」

キィィィ――――――――――・・・キュバババッ！！！

ミズキがトリガースペルと告げると、転送されてきた工具の群れが重力などを無視して放たれる。

「うわあああぁあぁぁぁあああぁああああああぁぁぁ！！！」

転んでニッパーが足を掠め、ハンマーが直撃しそうで直撃しない。
・・・見事な弄り方である。

ちなみに現在のＳｈｅ'ｏｌは、ミズキが作ったインターフェイスに宿ることで人間に真似出来ない処理が可能である。例えば・・・逃げたり隠れているリークの位置を的確に探し出し、対象の行動からパターンを分析した上でロックオンし、力のベクトルをどの位相に合わせれば当てる事が出来るか――当てない事が出来るかを瞬時に導き出すのである。

「リーク？なんで逃げるの？書類を見せれば良いだけなんだよ？」

「いえ、ミズキっ・・・死にます！死んじゃいますから！！」

「書類・・・何が書いてあるのかな？かな？？・・・・・・Ｆｉｒｅ」

スカカカカッドガガガッ――――――――カカガカガッ――――――――――

「ひぃ・・・ッ、切れた！ミズキ！！ちょっと首の皮カスりましたよ！！？」

「首、つながってるよね？なら、大丈夫なんだよ？？・・・それに、ちょんぱ☆されても繋いであげるから」

「ちょんぱ☆って可愛く言ってもダメです・・・！」

「リーク、書類を燃やしたり濡らしたりして処理しても無駄だよ？」

「燃やしても、濡らしても、Ｓｈｅ' ｏｌに解析させれば分かるから」

「ミ、ミズキ女史・・・取引をさせてください」

「却下。・・・・・・Ｆｉｒｅ」

ドドドッ――――――――ドドッ――――――

「鬼畜っ・・・鬼っ・・・悪魔っ！！」

「ふーん？・・・『Ｓｈｅ' ｏｌＴｙｐｅＢ』へ移行」

『ＴｙｐｅＢ移行――――完了しました』

「Ｆｉｒｅ」

ドカカカカッドカカカドカカカカカカカカカッカカカッ――――――――――・・・・・・

リークを囲むように、工具やボルト、ナット等が直径１０ｍ程の円を描く。

「・・・どこを狙って――――」

――――――――――――――――――パリィッ！！

・・・・・紫電がリークを包み込んだ。

「ギィイイィィィイィ・・・ッ・・・ガッ！！」

金切り声を叫びながら倒れ、髪の毛の焦げる臭いが漂う。

「空間中の電位差を操作して高電圧を発生させた。・・・見せる気になった？」

プスプスプス・・・黒い煙を出しながら搾り出すように言った。

「し、死ぬ・・・死ぬってば・・・」

ガクッと意識を手放すリーク。見事にボロボロで見る影も無かった。

『ターゲットの生体反応を確認。並びに目標沈黙を確認しました――ミッションコンプリート』

Ｓｈｅ- ｏｌが作戦終了を告げた。

「・・・リーク捕獲完了。あ、書類が燃えちゃった。ここまで抵抗したから気になるけど・・・可哀想よね」

ミズキは知らない。書類の中には自分で気がついてない癖まで、詳細に書かれていた事など・・・。
そして、リークは物凄く幸運だったのかもしれない。ミズキに内容を知られなかったという意味で。

・・・ここで内容を解析されていたら、リークの命があったかは不明である。

#4　うさぎさんとらいおんさん（後書き）

分からない事だらけでしたよね。
ちょこちょこと能力とか出てましたけど、
『廻る貴方と』の世界には特殊な能力を持った人物が登場します。

ミズキパパが、ダークな感じでアレなんで
・・・って書いちゃネタバレになっちゃいますね・x・；

ネタバレというか、私の頭の中の筋書きとか設定の話なんですが（笑

・・・じ、次回こそ遅れるんだからぁ＞＜

#5　特異点　前編（前書き）

Ｇｌｏｒｉａです。お久しぶりでっす―'ω'＊―
えっ、更新が大して変わってない？作者の気まぐれです（ぁ
というか、忙しければ忙しい程に話の続きを考える癖をどうにかしないと（笑

#5　特異点　前編

必死で逃げ回った結果、地獄の淵より生還したリークの目に最初に映ったのはミズキの顔だった。しかも、顔が逆さまに見える事から自分は横になっているようだと覚醒しきらない頭でぼんやりと認識する。

（あぁ・・・電撃を食らって失神したんでしたね）

・・・ふと、後頭部に柔らかい感触がするのに気がついた。

（・・・あれ、ミズキの顔が逆さまで、自分は横になっていて、後頭部に柔らかい感触！？）

「あぁ、リーク・・・目が覚めたのね」

「ミ、ミズキ？・・・えーっと・・・今、もしかして膝枕のような状況ですか？」

リークはミズキの膝の上に頭を載せられていた。つまり、膝枕である。

膝枕をされていると判明したリークはおろおろしている。

「なにそれ、変な言い方だよ？」

「・・・いえ、珍しく動揺しているようです」

「リークはいつも挙動不審だよ？・・・むしろ普通の時の方が珍し

いような？」

（あぁ・・・良い匂いが・・・今の時間は天国に違いない）

「ぁ、ところでリーク・・・耳掃除してもいい？」

「これは夢か！？夢ですね！？いえ、むしろ夢じゃありませんように！！」

「ふふっ・・・変なリーク」

ミズキは可愛らしく首を傾げてみせた。リーク卒倒モノである。
それにどこか、いつもと違う感じがする。仄かに漂う香水の香り。
そういえば、いつも化粧をしないミズキが化粧をしている。

（あれ・・・ミズキが化粧？妙ですね、彼女の私物に化粧品の類は殆ど無いのですが・・・）

「リーク、左向いて」

「よろこんで！」

それでも誘惑に勝てないのが男である。

（あぁ・・・天国です。本当に良い匂いだなぁ・・・）

クンカクンカ・・・とミズキの匂いを嗅ぐリーク、その姿は変態以上の何者でもなかった。
しかし、ミズキは微笑みながら耳の掃除を始めている。・・・まるで恋人の耳を掃除するように。

「ミズキ、何故・・・今日に限って化粧を？」

「・・・え？気付いてくれたの？・・・やったぁ」

花が咲いたようにミズキの顔が微笑んだ。

リークの頭で警告が鳴り響く、何かが妙だ。彼女はこんなに気を許さない。

（妙ですね。しかし、この天国を終わらせたくはない・・・もう少しだけ、もう少しだけ）

「ミ、ミズキ？・・・か、開発は良いのですか？」

「もう、疲れちゃった。死んだ人を蘇らせるなんて無理なのよ。」

突然、ミズキが変な事を言い始めた。

「死んだ人・・・？蘇らせる・・・？？」

「そうよ、私が心を許した最愛の人・・・燈哉（トウヤ）」

「燈哉・・・？あれ、どこかで聞いたことがあるような・・・」

（燈哉・・・特務部隊の英雄でしたか？）

「高柳　燈哉　男性　享年２０歳　軍属　特務大尉　閃光の二つ名を冠された高柳家の懐刀」

「・・・！？」

突然ミズキが機械口調になり、燈哉と呼ばれていた特務大尉の情報がミズキの口から紡がれていく。経歴、能力、戦功・・・数々の匿秘事項がミズキの口から流れていく。

「え？・・・なっ！？・・・ミズキ？ミズキ！？」

（やはり、何かが違う・・・！）

機械口調のミズキは情報を羅列していく

「あなた、誰ですか？・・・ミズキじゃありませんね？」

情報を羅列していたミズキの声が途切れる。
ミズキは黙ったまま、リークの方を向いて喋りだした。

「リーク＝ターナー　男性　軍属　技術少尉　数々の発明により高柳家の目に留まる」

自分の情報が羅列されている。信じられないことだが、自分の待遇が今まで良かったのは高柳家の暗躍があったらしい。半ば信じられない現実に、口を開けて聞く事しか出来なかった。

「・・・現在は、高柳　雅孝中将の推薦により高柳　美月技術大尉の下に配属される」

（高柳中将の・・・？頭の固い派閥の怒りを買ったわけじゃなかった訳ですね）

「・・・ってそうじゃない！あなた、何者なんですか？今更、気が

つきましたけど軍属の個人情報なんて機密事項ですよね？ミズキが知っているはずがありません。答えなさい。」

「・・・どちらの質問から答えればよろしいでしょうか？」

唖然とするリークに、機械口調のミズキが問いかけてきた。

#5　特異点　前編（後書き）

長くなっちゃったんで2話に分けました―'ω'っ―＝3

・・・読み返してみると1話でも良かったよーな？

気にしたら負けかな？・・・で、ですよねー？

＃5　特異点　後編（前書き）

切る箇所を間違えたっ
明らかに前編のが短くて後半のが長いよっ・・・！
もう泣きたいｐｑ

#5　特異点　後編

「まずは、あなたの正体から」

「Ａｎｓｗｅｒ　私はＳｈｅ，ｏｌ（シェオル）　高柳　美月により生み出された電子妖精　ヒトにより生み出された電子妖精とは一線を隔す独立生体型ＡＩプログラム」

電子妖精・・・それは設計時の段階で“何をやらせるか”方向性を決め、
製作された後は決められた事を、プログラム通りに自動で繰り返すＡＩである。

「Ｓｈｅ，ｏｌ・・・？ミズキのブレスレットに宿っていた電子妖精ですね？」

ミズキがブレスレットのようなインターフェイスを、身につけていたのを思い出す。

（そういえば、あのブレスレット・・・なんか淡く光っていましたね）

「Ｙｅｓ　管理者の指示を受け、あなたを昏倒させました　光っていたのは私です」

口に出して無くともＳｈｅ，ｏｌが答えたことに驚いたが、
それよりも先に・・・確認するべき事がある。いや、しなければならない。

「む・・・？ここはどこですか？」

「Ａｎｓｗｅｒ　ここは、私が作り出した仮想世界（バーチャル）　あなたの脳内にアクセスしています」

（仮想世界だって？・・・私の脳内に構築したのか？）

「私の・・・何故、あなたは軍部の秘匿事項を知っているのですか？」

「それらの質問には、答えられない部分が存在します」

「構わない」

「Ａｎｓｗｅｒ　軍のセキュリティやネットワークを管理している為、情報管理をしています」

「そんな・・・軍の情報管理を、電子妖精に出来る訳がない！本体はどこにあるんです・・・？」

通常、軍や国が管理するサーバーには秘匿性が必要とされる。それでいて、莫大な量のデータを扱わなければならないので、１体の電子妖精だけでは無理だ。例え組織化された複数の電子妖精で管理させようとしても、電子妖精は所詮・・・人が作り出した人工のＡＩプログラムなので、緊急時の対応等には対処がしきれない。

故に、リークは大規模なサーバーが研究棟のどこかにあるのだと思っていた。

「Ａｎｓｗｅｒ　あなたの近くです　これ以上は機密事項なので権限を上げてください」

（私の近く・・・と来ましたか、まさかだとは思いますが・・・ね）

「大体は読めましたが・・・権限？」

「アクセス権限　現在のあなたにはアクセス権限？が該当します」

情報の閲覧には権限を上げる必要があるようだ。

「階級が上がれば権限は大きくなるのかな？」

「Ｙｅｓ　階級が上がり、上位権限を持った人間の過半数の新任が得られれば承認されます」

「権限が無くとも、当ててみせようか？」

「現段階での予想材料は６０％　指示が無いので発言は出来ませんが、聞くことは可能です」

ＡＩらしからぬ言い方に苦笑しながらリークは尋ねた。

「私の脳内にアクセスするのだって本来は厳禁なのでしょう？」

「Ｙｅｓ　ですが、管理者より指示があったのでアクセスしています」

「Ｓｈｅ，ｏｌはミズキの能力による電子妖精で、Ｓｈｅ，ｏｌが軍の情報を管理しているのなら・・・」

「Ｓｔｏｐ　それ以上の発言が確認された場合には、Ｄｅｌｅｔｅへ移行します」

「なるほど、追加の質問を良いかな？」

「どうぞ」

「さっきから疑問だったんだが・・・何故、ＡＩが私の思考の先を予測出来る？」

そう、電子妖精と言えどＡＩである。
人間の思考パターンを解析できるＡＩは現在でも確認されていない。

「Ａｎｓｗｅｒ　ですが、その質問はあなたらしくない」

「私らしくない？」

「現時点で私が、あなたの脳内にアクセスしている状況から推測されます」

「・・・それにしても、人の脳から思考までトレースすることなんて出来ない」

正確には無いわけではないのだが、簡単な『怒り』、『喜び』、『悲しみ』・・・といった程度を認識出来る程度である。人間が何を考えているかを先読みするようなＡＩは存在しない筈なのだ。

「リーク＝ターナー　あなたは私の能力を知らないのですね？」

「あぁ、何も知らない　大尉とミズキの関係も・・・今、ミズキが何を作っているのかも」

「Ａｎｓｗｅｒ　私の能力は“情報処理“です」

「情報処理・・・？そんなの聞いたこともない、特異過ぎる」

「ご存知の通り、ミズキは完全記憶能力を有しています」

「知ってる・・・だが、それがどうして君に結びつく？」

「Ａｎｓｗｅｒ　完全記憶能力によって掛かる脳への負荷は、常人では耐えられない危険なものです　通常、完全記憶能力者は余分な情報を“流すこと”で脳への負荷を減らします」

「それについても知ってる・・・ミズキは違うのか？」

「Ｙｅｓ　ミズキは目や耳・・・五感から入ってくる情報の全てを並列処理しています」

予想の斜め上をいく話をされ、リークは混乱した。

（無理だ、人間の処理出来る範疇を超えている・・・！）

「馬鹿な・・・！？そんなの人間が耐えられる訳がない！！脳死するぞ！！？」

「故に、私という能力が発現しました」

ミズキの生存本能がＳｈｅ，ｏｌという特殊な能力を発言させたらしい。

だが、考え無しにも程がある。死ぬことを考えれば、無茶だと分かるだろうに。

「馬鹿げてる・・・ミズキは自分から？」

「Ｎｏ　秘匿情報５５５２２７０にて秘匿情報５５５２２８１、秘匿情報５５５２３９１・・・」

会話に秘匿情報の項目が流れ出した。ミズキの姿をしたＳｈｅ，ｏｌの口からは７桁のコードが流れていく。最初の３桁が５で統一されてるのを察すると、似たような項目に制限がかけられているのだろう。

「秘匿情報・・・ねぇ」

「すみません　上位権限によりブロックされています　ミズキに直接聞いてください」

「分かったよ・・・最後に良いかな？」

「どうぞ」

知的好奇心と、ちょっとの悪戯心からＳｈｅ，ｏｌに聞いてみた。

「なんで電子妖精のＳｈｅ，ｏｌまで、ミズキの姿なんだい？」

「私はミズキの負荷を無くす為に発現した能力――基はミズキがプログラムの概念をミズキが理解した時点で生まれていました　ミズキ自身の完全記憶能力により、人格等も形成されている為にミズキと私は似ているのでしょう」

「なるほど・・・周りにノイズが増えてきたけど、これは？」
「Ａｎｓｗｅｒ　リーク・・・あなたの目覚めが、近いと思・・・」
映像が途切れ・・・そこで、目が覚めた。物凄い疲労感が全身を包んでいる。
重い目蓋を開くと視界に入ってきたものは、培養ポットの群れ。
なんでこんなところに？そう、思っていたリークは気がついた。
・・・自分は、培養ポットの中に居るのだと。
白衣を纏ったミズキが声をかけてきた
「リーク、目が覚めた？」
『ミズキ・・・なんで』と声をかけようと思って気がついた。
培養液のような液体の中に、自分は居るのだと。
鼻や口を固定しているマスクから、酸素が供給されているらしい。
「何か言いたいみたいだけど、今は傷を治して」
目で訴えてみる・・・が、効果はなかった。
「怪我させた私が悪いんだけど・・・今はゆっくりしてね？」
キーボードに指を走らせた後、ミズキは白衣を翻し部屋から消えた。
（これは・・・軍の施設でしょうか？治療機にしては規模が大きすぎる・・・？）
（色んな話が一度に入ってきました・・・この期に整理でもします

かね）

考えても埒があかないので、リークは眠ることにした。

#5　特異点　後編（後書き）

シェオルとリークのお話ですね。
次は能力とか燈哉、美月の話にしようと思います・x・

#6　軍事国家　前編（前書き）

1週間とちょっとぶりです！Ｇｌｏｒｉａの中身です―'ω'っ―
＝3
さて、会話がありません（泣

長い、だるい、飽きた、設定多すぎだろ、頭沸いてんじゃｒｙ
・・・そんな読者様の心の声が聞こえてくるような気がするです。

アッー

#6　軍事国家　前編

通常――――この世界で能力を持つものは極めて少ない。
何故なら世界のどの国でも、能力を持つものは異端者とされたからだ。

ヨーロッパの魔女狩り、日本での鬼伝説など――――例を挙げると切りが無い。

過去を振り返ってみても異端者は民衆などに迫害され、淘汰される運命にある。
では何故、この国には能力者が淘汰されていないのか。

簡単な事だ――――ただの人間より、バケモノの方が戦争では使いやすいからだ。
――――では、バケモノを手に入れるにはどうすればいいか。

ただの人間を鍛えてどうにかなるレベルから、どうにもならないレベルへ――――
国が求めた結論は、２１世紀前半から人体実験を公認とすることだった。

もちろん、国民は黙っては居なかった。
マスメディアを始めとする保守派が、国の軍部や特定の企業を猛烈

なパッシングを行う。

――しかし、パッシングを始めた頃には全てが遅かった。
国が水面下で進めていた人体実験は、その頃に成果を出しつつあった為である。

ＰＳｉ（サイ）――最初に成果を出したのは誰もが１度は耳にする漫画や小説、アニメ、映画に出てくる超能力であった。Ｐｓｙｃｈｏｋｉｎｅｓｉｓ（サイコキネシス）、Ｐｙｒｏｋｉｎｅｓｉｓ《発火能力》、Ｔｅｌｅｐｏｒｔａｔｉｏｎ（テレポーテーション）、Ｔｅｌｅｐａｔｈｙ（テレパシー）・・・等である。

国が実験成果として発表したのは、４人のＰＳｉだった。
デモンストレーションでは、紛争地域に投入した時の映像が使われた。

紛争地域での戦闘は一方的なものだった。
テレポートによる通常の歩兵部隊を高速展開で、戦闘をしていた両軍は急に現れた第三勢力に驚くことしか出来なかった。驚いている間に制圧射撃を行われ、陣形は総崩れとなった。

テレパシーによる無線を伴わない連絡により、連絡は速やかに行われた。連絡を終えた後には敵兵の精神操作を行い、両軍の陣地内部で爆発や銃声が飛び交うこととなった。

急に現れた第三勢力へ反撃を行い始めると、パニックに陥っていた兵士達も落ち着きを取り戻して反撃に加わり始めたが、サイコキネシスによる防壁によって銃弾等は全て防がれてしまった。

これでは全滅すると判断した敵の小隊長は、戦車による救援を頼んだ。

戦車が到着したことで敵軍の士気は奮い立ったが、肝心の砲塔をサイコキネシスによってへし折られてしまった。戦車ですら敵わない現状を見た兵士達は、自らが生き残る為に塹壕へと逃げ込んだが、パイロキネシスによる爆破・爆撃により塹壕は墓穴へと変わった。

大規模に国をパッシングしていた国民達も、紛争介入時の自軍の被害を見て大人しくなってしまった。紛争地域の両軍と自軍の戦力比は１０倍以上あった筈なのに、死者は１５００人中３人しか居なかったからだ。

――結果として研究は成功を収めた。それが全ての元凶であったのかもしれない。

そして、この瞬間から国は貿易によって栄えていた過去を捨て去り、武力国家としての名乗りを上げた。つまり、世界各国との貿易を全て拒否した上で鎖国したのだ。

無論、国内には海外からの留学生達もたくさん居た。

『他所の国で何が起ころうと、外国人である自分達は被験対象には

ならないだろう』――――との考えから我、関せずと残っていた人々である。彼らは数百年前に解いた鎖国を復活させるとは夢にも思わなかったのだった。

当初、彼らは鎖国状態に入った日本から脱出するのは不可能だと嘆いた。
ところが日本が取った行動は、自国へ彼らを送り届けた。鎖国であるにも拘わらずに。

決して少なくない数の留学生達は、喜びながら親元へ帰っていった。

人体実験の被験者は、国民からランダムに決められた。
赤い紙――――第二次世界大戦などで徴兵に使われた赤紙である。

軍部は赤紙によって選ばれた被験者を対象に、大々的な人体実験を行う。
・・・しかし、研究を行う為には施設・資金・研究対象が必要である。

国がスポンサーである為に資金、研究対象は困らなかった。
しかし、施設が圧倒的に足りなかった。国が最終的に下した結論は、全国の６歳から１２歳の子供を対象とした研究施設“Ｓｃｈｏｏｌ”《スクール》を設立する。

Ｓｃｈｏｏｌで子供達はカテゴリー別にクラス別にされ、以下のようなプログラムを受けさせられた。
６歳（５歳）・・・適性検査、体力テスト、ＩＱテスト、通常教育
７歳～１１歳・・・能力開発（クラス別）、能力制御、通常教育
１２歳・・・実技訓練、通常教育
１３歳～１５歳・・・実戦訓練、通常教育

数段階によって育成された子供達は、普通に高校へ進学し、大学などに進学し、恋人を作り、結婚して子供を育み、国内で生活することになる。

ちなみに、能力が１１歳まで発現しなかった子供に関しては“転校”することになる。
この転校とは文字通りの“転校”であるが、『能力を開発する学校』から『体を開発・研究する学校』へ転校するという意味となる。

体を開発・・・と言っても成長期の子供を改造しても意味が無いので、１２歳から行われる実技訓練に生身のまま実戦訓練として受けさせ、戦闘経験を積ませていく。体が成人に近づくと、チタンや炭素複合材料を体に埋め込み改造される。人間の骨格とはカルシウムやリン等によって形成されているが、文字通り人間から改造されたバケモノとなる。

―――しかし、改造には限度がある。
どれほど骨を、筋肉を置き換えたとしても内臓や脳などは生身である。

銃弾などによって脳や内臓を損傷すれば死ぬ・・・ということだ。

政府は、その点について「人はいつか死ぬ」と述べている。
この体制が始まって、既に３０年以上が経過した。今ではＳｃｈｏｏｌの第一期生も子供を作り、Ｓｃｈｏｏｌへ通わせる事が一般的となっている。

――何故、保守派は大人しくなったのだろうか？
自分の息子が、娘が、孫が非人道的な実験の対象となっているにも拘らず――
軍部が目を光らせるようになったから？Ｓｃｈｏｏｌに通う子供たちが非人道的な実験を受けたにも拘らず、力に飲まれず、優しさを忘れず、人間性に溢れていたからだろうか？

#6　軍事国家　前編（後書き）

ほらね！長かったよね！！
でもね！2話構成なんだよっ！！！
ごめんなさいｌｉｌｉｏｒｚ

#6　軍事国家　後編（前書き）

Ｇｌｏｒｉａです！話の長くて文才がごめんなさいなＧｌｏｒｉａです！！

グミッ―'ω'―三―'ω'―グミッ

大変・・・残念な結果になってますけど

見捨てないでやってくださいね（，；ω；、）ブワッ

#6　軍事国家　後編

答えは『全て』だろう。
国としては強力な戦力となる子供達の中に、不安材料である反乱分子が紛れていては困るし、あまり酷い実験を行うことで子供達の心に『国という敵』を作るわけにはいかなかった。

だから国は学力、体力、精神的な部分にも力を入れた。

その上で、マスメディアを通じたサブリミナル（刷り込みによる洗脳）で黙殺させた。

何故この国は開発を急いだのか、あまりにも無理のある開発。その答えは、数年前に現れた――――第三次世界大戦（Ｗｏｕｌｄ　Ｗａｒ　３）勃発。戦術核などのＡＢＣ兵器の使用を禁じたにも拘らず、世界人口を２／３まで減らした史上最悪の戦争である。

（世界人口は約６８億人なので、約２２．６億人の被害となる。過去最大の戦争である第二次世界大戦の死者ですら約５６００万人なので、単純計算で約４０倍の死者が出たと言える）

同年３月――――武力国家としてＳｃｈｏｏｌを導入し、体制を整えた日本は防衛ラインを構築。
世界中のどの国の味方にも、敵にもならぬまま、戦争に突入した。

当初は戦争に参加しない日本を、どこの国も相手にしなかったがＷＷ３勃発から数ヵ月後には中国・朝鮮半島などを攻撃する際の足がかりとして、日本という島国を争う動きが目立ち始めた。

同年６月――――これに対し日本は防衛ラインを強化。
成績優秀であるＳｃｈｏｏｌ卒業生を再召還することを発表。
能力者２０００人を領空、領海に配備した。

６月１５日――――ＷＷ２の時と同様にアメリカ軍が侵攻開始。
沖縄方面に能力者２０名、強化歩兵を２大隊向かわせた。

第二次沖縄沖海戦
アメリカ連合軍　空母６　イージス駆逐艦３０　イージス巡洋艦１０　輸送艦１５
日本軍　空母２　特務艦５　輸送艦２５

定石通りのアメリカ連合艦隊へ、軍事衛星からの情報が流れた。『敵空母２、巡洋艦５、輸送艦２５』――――この情報を目の当たりにしたアメリカ軍司令官は激昂した。本土を目前とするこの海戦で空母６隻、駆逐艦・巡洋艦計４０隻の艦隊に対して日本軍の艦隊には巡洋艦クラスの特務艦が５隻しか見当たらない、司令官が激昂するのも当然だ。

空母が２隻に大量の輸送艦という、あまりにも馬鹿にされた編成だ

った。これを見たアメリカ軍は蹴散らせと言わんばかりの正面突破に出る。

日本軍は沖縄沖にて輸送艦から足場となる“浮き島”を大量に放出。空母は沖縄から出発した、無人機の補給地点として機能していた。

能力者達を乗せた特務艦が“浮き島”の群れの中で等間隔に並ぶ。

“浮き島”は、それ自体が歩兵達の足場であり、自衛機能を備えた陣地である。

２０名程度が乗って戦える足場として、備え付けている武器などの物資で補給を行う。

レーダーやアクティブソナーを搭載され、機銃やデコイ（フレアやチャフ）でミサイルや魚雷から自衛を行い、直撃を食らってもブロックごとに切り離せるようになっている為、滅多に沈むことは無い。対航空機にＳＡＭ（艦対空ミサイル）までが装備されているので、海に浮かぶ小型トーチカ陣地と呼べる代物である。

“浮き島”群では肉体を改造された歩兵が、浮き島と浮き島をジャンプで移動しつつ、後ろから能力者達がサポートする。肉体を改造された歩兵達は２０ｍ弱のジャンプが可能で、背中に背負ったバックパックについているブースターの使用により１００ｍから１５０ｍの跳躍が可能である。

歩兵が海の上を飛んで行く様は信じがたいものであった。高振動ヒートナイフを片手に蹂躙した歩兵達は、一騎当千の働きをした。敵の銃撃や爆風に耐え、敵艦へ潜り込み、単体で敵艦を沈めていったのである。

結果的にアメリカ連合軍の艦隊は壊滅。
航空機群、空母、駆逐艦、巡洋艦を撃沈。新型のイージス艦と輸送艦は拿捕された。

日本軍被害：強化歩兵８が重傷、１９人が軽傷、死者２　能力者の被害０

第二次沖縄沖海戦による被害で、アメリカ連合軍は日本からの撤退を余儀なくされた。
アメリカ連合軍が当初、馬鹿にしていた『空母が２隻に巡洋艦数隻というおもちゃの軍隊』には機銃が効かず、砲弾も効かず、対艦ミサイルまでもが防がれた。

まるで悪夢のような海戦で、世界中を震撼させるには十分であった

―――

能力者達は各々に応じた能力を駆使することで敵のヘリ、戦艦、戦闘機などの砲撃等から自軍の歩兵を守った。能力者も初期の頃とは異なり、ＰＳｉ以外にも様々な能力を持つ者が増えていた。能力の

幅が広がったのも、戦場を一方的なものに変えた原因でもある。

電撃を操るもの――《ボルテージ》

重力などのベクトルを操作するもの――《タンジェントスペース》

複数の無人機などの兵器を同時に操るもの――《ラジオコントローラー》

封鎖されている筈の無線に介入して、誤報を敵軍に流すもの――《ブラックジョーク》

自分の体の周囲にフィールドを形成して物理的に防ぐもの――《マイスペース》

・・・例に出ているのは一握りの氷山の一角である。

様々な能力者も数が増えるに従い、希少種の存在が確認された。

非常に強力な力を持つものも居れば、戦闘に使い道も無さそうな能力もあった。

ただ、共通項として上げられるのは『使い方次第』でどんな能力よりも強力な力となると言うことだった。最たる例が高柳　燈哉、高柳　美月――（開戦時１８歳）の存在である。

燈哉の能力は非常にシンプルな能力だった。

身体能力と装備の強化――Ｈａｄｅｓ（ハデス）

生身でありながら鉄鋼弾を弾き返し、対艦ミサイルの直撃を受けて

も負傷しないモノ。
生身でありながら、強化歩兵の数倍から数十倍の身体能力を発揮する。敵艦を素手で解体し、戦車の砲塔を片手掴んで振り回し、音速で移動する戦闘機に向かって銃弾を投げて撃墜する――――バケモノ。

彼には専属のオペレーターがついた。高柳　美月である。
高柳　雅孝の実の娘であり、彼の義理の妹であり、恋人にあたる人物であった。

彼女本来の能力は『完全記憶能力』であるが、Ｓｈｅ，ｏｌ（シェオル）と呼ばれる電子妖精を発現させた。ヒトが作った人工知能ではなく、ヒトから産まれた電子妖精Ｓｈｅ，ｏｌは敵の軍事衛星のハッキング、敵情報系の撹乱、戦況のパワーバランス変化の推移、逐一変化していく自軍と敵軍の全個体識別などを全て単独で可能とする――――バケモノである。

美月は単独で、（無人兵器などの道具が必要だが）敵の機動部隊を殲滅することも可能だ。
しかし、彼女の真価は数百機の無人兵器を同時に操りながらオペレーターとして的確なサポートを行うことで発揮される。

この二人の存在が、高柳という組織を強固なモノへと変えていった。

#6　軍事国家　後編（後書き）

あっ・・・書くの忘れてました。
当たり前過ぎるけど一応書いておきますね・ｘ・；

この『廻る貴方と』に出てくる人物、国は架空の存在です。
日本ですとか、アメリカと言った国名を使わせていただいてます。
日本はこんな怪しげな研究なんてしてませんからね？（笑

次の更新は遅れると思いますっ！
・・・と言って来週ぐらいに更新しそーですけど（・ω・；）

＃7　観賞（露出ぷれい）　前編（前書き）

１週間ぶりですねっＧｌｏｒｉａです（・ω・）
インフルさんとお別れしました！

今回も前編・後編で後編のが長いのよ・・・

#7　観賞（露出ぷれい）　前編

（新手の虐めですか！？虐めですよね！！？）

泣き叫びたくても体は動かせず、口も塞がれているので声も出ない。
しかし、目の前に広がる光景は絶望ばかりを深くしていく。

「リークどうしたの？・・・お腹でも痛いの？」

固形物など1週間近く取ってない、なのに無邪気な顔で聞いてくるのは天然か。

（私にこんな気はありませんよ！！見るな！見るなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？）

目を見開いて頬を染めるリーク・・・彼は医療用のポットの中に居た―――裸で。
リークが裸だと気がついたのは意識が戻り、寝て、起きた後だった。

（ぇぅ・・・ん？朝です・・・か？）

体力を使い果たし、医療ポットに入れられた体勢のままだったので意識があやふやだった。おまけに彼が入れられているポットが並ぶ部屋は若干薄暗かったので、朝か夜かの区別がつかないのである。

（まどろみが続くような・・・布団の魔力ですね・・・ん、布団はどこですか？）

（服も・・・無い？裸で寝る癖は無かったはずですが・・・）

溶液は温度管理がされているのか、とても温かい。
空腹感も感じないということは何かしらの処理をされているのだろう。
特にすることもなく、溶液の中に浮かんでいるだけの時間が２０分ほど続いた。

「あ、リーク起きた？」

現れたのは白衣に身を包んだミズキだった。

（あぁ・・・ミズキの白衣って良いですね・・・）

そんな事を思っていると、自分が裸だということを思い出した。

（あ・・・れ・・・私、裸ですよ・・・ね？）

「んー・・・結構損傷が激しかったから心配したけど、明日には出れそうだね」

（は・・・はだ・・・裸じゃないですかぁぁあああぁぁぁぁ！！）

男とは悲しい生き物である。
好きな人が居たとしても、朝の生理現象には逆らえるわけも無い。

（動け！動かない！？動くんですよ私の手ぇぇぇぇ！！！隠せないじゃないですかぁぁあぁぁ！！！？）

「急にどうしたのリーク？どっか痒いの？」

（だめ！見ちゃダメです！！男性の神秘の真っ最中なんです！！見ちゃダメなのぉぉぉおおお！！？）

声は伝わらない、手は動かない、もう誰か殺してくれと絶望するリ

ーク。

「むっ・・・リーク？」

（終わった・・・見られた・・・もうお婿にいけない・・・）

「血圧が上がってくよ？あ・・・ご、ごめんね！」

何やら悟ったミズキが赤くなった。

「迂闊だった・・・水温が３８度じゃ・・・ちょっと熱いよね？熱いなら言ってくれればいいのに」

（そこ！？そこなんですか！！？いや、確かに水温は熱いですけど！赤くなったのは？？！）

「よし、これで良いと思うの・・・あ、今日の午後からパパが来るから」

（パ・・・パ？）

「なんか、開発の進展状況を見にくるみたいよ」

（タカヤナギ中将の視察ですか・・・このまま！！？）

そう、言い残してミズキは白衣を翻して戻っていく。
リークは『ハハハ、ソンナ馬鹿ナ』と機械語調に心の中で笑った。
医療ポットから出れるのは、明日だと言っていた。

（きっと・・・きっと、中将が来る前に出して貰えるんですよ）

予想は斜め４５度を超えて、３回転した後に戻ってきた。
タカヤナギ中将はやってきた。６人の部下を連れて。

「・・・しい愛娘な・・・らな」

「・・・パが私の事を好きだと愛し・・・っても、トウ・・・らない」

嫌な予感がたっぷりする中でリークは悟った。
こ の ま ま 会 う こ と に な る の だ と

（もう・・・好きにして下さい・・・ミズキには見られたし、中将

に見られたって・・・）

プシュッ――――

軽い空気圧の音がして扉が開く。
部屋に入ってくるのはミズキを先頭に、タカヤナギ中将・・・と部下達だった。

#7　観賞（露出ぷれい）　前編（後書き）

後編に続きます・ｘ・

#7　観賞（露出ぷれい）　後編（前書き）

後編です。
リークはＨＥＮＴＡＩで紳士でマゾかもしれません。
小説って自分の好き勝手に書けるのが良いＤＥＡＴＨね☆

#7　観賞（露出ぷれい）　後編

「パパ、ここがリークの研究室・・・になる予定の部屋」

（む？私の研究室？ミズキの研究室に配属されたんじゃないんで・・・す・・・へ？？）

リークは固まった。なんていうかヘビに睨まれた蛙よりも固まった。何故か？簡単な話である。ミズキと一緒に入ってきたのはタカヤナギ中将だけではない。
彼の“部下達”も居るのである。

部下の数は６名・・・男女比は１：２・・・部下の半分以上が女性だった。
そう、男性２人、女性４人だった。屈強そうな明らかに鬼軍曹です！という風貌のゴツい男性の隣に、軍服などよりファッション誌に出ていそうな整った容姿の優しげな男性が居た。

彼らは、医療ポットの中に浮かんでいるリークを見て声をかけた。

「リーク＝ターナーさん？・・・って外国の人？」

軽そうな声で最初に声をかけてきたのは優しげな男性の方だった。

「俺は長谷川　湊　アコニット《ハセガワ　ミナト　アコニット》、階級は准尉だ・・・アコニットでもミナトでも好きな方で呼んでくれ」

（アコニット・・・ハーフか何かですかね？）

ゴツい方の男性が口を開く・・・如何にも無口そうな人だ。

「中原（ナカハラ）　猛（タケル）、階級は曹長・・・タケっちとでも呼んでくれ」

ゴパァ・・・ッ

リークは溶液の中で盛大に噴いた。

（軽っ！？ゴツくて無口そうなキャラなのに話しやすい人ですね！！？）

「タケっち赤くなってる、可愛いー！」

横できゃいきゃいと騒ぎだす女性陣を制して、アッシュブロンドの勝気そうな美女が口を開く・・・どうやら彼女が隊長格らしい。

「ミズキ女史、リーク史の護衛に当たることになりました！ＰＳｉ特務０１小隊、隊長のクリスタベル中尉です。・・・クリスとお呼びくだ・・・？」

「ストップ！ちょっとクリス、私になんで敬語なの？敬語禁止よね？？」

手で自己紹介をするクリスを制して、口を挟んだミズキを見てクリスタベル―――クリスは頭を抱えた・・・またか、とでも言いたげに。

「ミズキ、相変わらずなのね・・・」

「えーっと・・・なにが？」

「もう！・・・天然なところまで変わってないんだから」

（苦労人だ・・・！苦労人の香りがしますよ！！・・・というか知り合いなんですね）

「ミズキは置いといて、左から自己紹介させるわね？」

「ちょ・・・っ、その扱いは酷いよクリス・・・」

促されて口を開いたのは、場の空気を和ませるような優しい雰囲気を纏った美人である。
長い黒髪を背中で纏めている・・・和服とかを着せたら似合うだろうと思わせる女性だ。

「長谷川　刹那　オルキス《ハセガワ　セツナ　オルキス》と申します・・・階級は軍曹さんです」

「俺の妹だ。手ぇ・・・出したら、頭に素敵な風穴が開くと思ってくれ」

（・・・シスコンですね。これだけ面が整ってるのにシスコンですか）

「リーク、セツナは料理が得意な大和撫子なんだよ？・・・セツナに手を出そうとした勇者がたくさん居たんだけど、文字通り風あ・・・」

「ちょっと待て、ミズキ・・・言い過ぎだ！それじゃただのシスコンじゃないか」

「えっ、“ただのシスコン”じゃなかったの？」

・・・と驚いたように言ったのはクリスである。

「おい、クリス・・・同期でも言っていい事と悪いことがあるんだぞ？」

「そんな・・・セツナに欲情する変態のシスコンだったのね・・・？」

・・・一緒になって驚いたようにトドメを刺すミズキ。
そんな会話を聞いていたセツナが顔を赤くして否定した。

「ちっ・・・違います！兄さんは確かに変態ですけど、とっても優しいんですよ？」

最愛の妹から変態と言われたミナトは、抜け殻のように膝をついたまま動かなくなった。
・・・と思ったら腰のホルスターから拳銃を取り出す。

「待て、早まるな・・・セーフティを解除するな！？」

慌ててタケルが取り押さえようとする

「放せっ・・・タケル！セツナに嫌われた俺なんて生きている価値がないっ！！」

（・・・どこまで続くんでしょうか、この昼ドラの演劇バージョン）

「兄さん死んじゃダメ！死んじゃ・・・ヤダよぅ・・・」

涙目になって上目遣いに懇願するセツナ・・・卒倒物の可愛さだった。

ミズキとクリス、他の隊員達はそんな様子を見てニヤニヤしていた！

（お前ら確信犯ですね！？っていうか、他の子達も日常なんですかこれ！？）

「ふぅ、あの表情だけで御飯3杯は食べれる・・・可愛いだろ」

いつの間にか、医療ポットの近くまで移動したタケルが獰猛な笑みを浮かべていた。

「ねぇ、ところでミズキ・・・彼、なんで喋らないの？」

「うん？ちょっと、クリス・・・ボケる歳じゃないでしょ？」

「あんた喧嘩売ってる？大体、あんたと私達って同期でしょーが・・・」

「クリス、水の中で喋れるの？」

「いや、無理だけど・・・なんで？」

「リークは治療中で、医療ポットの中にはキュアが満たされてるんだよ？」

キュアとは医療ポットなどに満たす溶液の総称で、ＤＮＡから読み取ったデータを基に損傷した部位の治療に使われる。内臓系に作用するもの、切り傷などの外傷に作用するものなどがある。

「いや・・・だから、喋れる手段なんていくらでもあるでしょう」

「・・・ぁ、そっか」

あんたねぇ・・・と呆れるクリスを尻目に、ミズキが何やら操作をしている。

「・・・最後に良い？」

「ふぇ・・・何？良いよ？？あ、マイクってこれか・・・マイクテス、マイクテス」

「リークさんにフィルターをかけるとか、思わなかったわけ？・・・全裸は酷いって」

半ば苦笑しながらも眼福眼福と目に焼き付ける女性陣
ガガッ――――・・・マイクの音声が繋がった。

『見るな！見るなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！』

リーク、決死の悲痛な・・・魂の叫びだった。

#7　観賞（露出ぷれい）　後編（後書き）

そして、気がつきました。
パパさん出てるのに会話が無かったｗｗｗ

クリスタベル・ミナト・タケル・セツナ
４人が一気に増えました！

作者的にオススメは刹那さんですね。
黒髪の女性って良いよねぃ・ｗ・

#8　再開（前書き）

遅れましたっ
本当にお待たせしました！Ｇｌｏｒｉａの中の人です・ｘ・；
今回は前回に出て来れなかった２人を出したいと思います！

#8　再開

『ミズキ！？お願いですから露出プレイを終わらせてくださいっ！！』

マイクを通じて会話に参加出来るようになった最初の一言は悲痛な叫びだった。

「露出プレイって・・・やっぱり変態さんだね」

「面は良いのにねー・・・まぁ眼福だから私は大歓迎よ？」

そんなリークを尻目にミズキとクリスが笑っている。
タカヤナギ中将は会話の輪に加わるタイミングを狙っているが、隙がなかった。

「この声・・・まさかリーク！？」

急に大きな声を上げたのは、金髪に碧眼で少し幼い外見をした女性だった。

彼女の隣には、亜麻色の髪をリボンで右側に纏めた・・・所謂、サイドポニーと呼ばれる髪型をした女性が立っている。いつもは寡黙な彼女が大きな声を上げたので、クリス達も驚いていた。

「ちょっ、何？どうしたの？どうしたの？・・・ベル？？」

サイドポニーの女性が驚いたように口を開く。

「ベルが大きな声を出すなんて初めてじゃないか？」

イザベラと呼ばれた女性は晒し者になっているリークを見て呆然としている。
ミズキは記憶の中の同期や先輩、下級生達の顔と名前を検索するが該当者が見当たらない。

「・・・そういえば、彼女達は？」

「あっ・・・忘れてた！ミズキは知らないよね？」

納得したようにクリスが残りの2人に自己紹介を促す

「イザベラ、サヤカ・・・ミズキとリークさんに挨拶して？」

「・・・っ！？あっ、あのっ・・・失礼しましたっ」

普段から寡黙な所為か、顔を真っ赤にしながらイザベラと呼ばれた女性は口をパクパクさせている。サヤカと呼ばれた女性は喋りたくてウズウズしながら自分の出番を待っている。

「えっと・・・イザベラ＝フォン＝ハイトフェルト、階級は伍長です」

『ベ・・・ベル？なんで君がこんなところに！？』

どうやら二人は面識があるようだ。

「おやおやおやぁ・・・？二人は面識があるのかにゃ～？」

クリスが邪悪な笑みを浮かべる。
恋話（コイバナ）の匂いを嗅ぎつけたミズキとセツナ、サヤカまで邪悪な笑みを浮かべる。

「“私の可愛いベル”に男の知り合いとな・・・？」

「隊長、これは・・・コイバナの匂いがしますね」

「査問委員会に掛けましょう」

「こんな事もあろうかと、ポットには色んな装備がついてるのだー！」

上からサヤカ、セツナ、クリス、ミズキである。

『ちょっと待て！？こんな事もあろうかってなんですか！？装置ってなに！？なんなの！！？』

「女とは怖いものだな・・・ミナトっち」

「あぁ・・・恋愛の匂いを嗅ぎつけると女は怖いのだよ・・・タケっち」

『結局、タケルさんはタケっちなんですね！？っていうか、そこの姦しい女達を止めて下さいっ！？』

「無理だ」

・・・とミナトが首を振る。

「無理だな」

・・・とタケルも首を振る。
ここしかない！とチャンスを窺っていたタカヤナギ中将が口を開く。

「うむ、楽しそうな娘達を止めることなど・・・」

「あれ？・・・パパまだ居たの？用が済んだら帰れば良いのに」

「・・・存在まで否定されたっ」

チャンスと会話に飛び込んだ中将だったが、愛娘に一蹴され中将は泣きたくなった。
そんな悲劇の向こう側では言葉の弾幕に晒されたリークが居た。

「あれー？白状しないとどうなるかなぁ？あっ、私は悪くないよ？ベルとどんな関係なのか綺麗さっぱり白状して、身の潔白を示せば良いんだよ？黙秘権？そんなのあるわけないじゃないですかー！ほらほらほらほら、早く白状しちゃおうよぅ！」

リークへと足を進めるサヤカは手をワキワキさせながら邪悪な笑みを浮かべている・・・彼女のマシンガントークが止む気配は無かった。

『ちょっ、ちょっと待ってください・・・貴女は？』

「あっ、自己紹介がまだだったね！私は雪村　沙耶香　エーデルワイス《ユキムラ　サヤカ　エーデルワイス》・・・雪の村に咲く可憐な薄雪草ったぁ私のことですよ！階級はこんなんだけど少尉やってます！好きな男性のタイプはノリツッコミが出来る人！好きな食べ物はベル！リークさんは・・・うーん、及第点と合格のあい・・・ったぁ！？」

スッパーン！！

・・・と良い音で、豪気にハリセンで後頭部をぶった炊かれたサヤカが倒れる。

「サヤカ、黙りなさい・・・話が長いしリークさんが困ってるでしょ？」

「ちょっとクリスぅ・・・良いツッコミだったけど、痛いよぅ・・・」

「あんたに突っ込むと、一日の気力の1割が消えるのよ・・・」

「むむむっ、せっちゃん！クリスからラヴなオーラが見えるよっ！きっとクリスはリークさんにホの字と見たね！・・・ほら！クリスが赤くなって黙って下向いてる！図星？図星じゃない？ちょっと私凄いかも！名探偵さんだねっ」

「えっ、えっ・・・？いや、どっちかと言うと隊長が怒りを噛み殺してるような・・・」

サヤカから急に話題を振られたセツナが几帳面に答える。

「・・・逃げるぞ、タケル」

「うむ、まだ生きたいからな」

男二人組みは危険を察知すると脱出準備を始めた。

『ちょっ！？逃げるって私は逃げられないんですけどっ！！』

「リーク・・・良いヤツだったな」

・・・とミナトが首を振る。

「無茶・・・しやがって・・・悲しい事件だったね」

・・・とタケルが遠い目で壁を見つめる。

『ちょっと待って！？死んでないよ！？ってか勝手に殺さないで下さ・・・っ！！！？』

背中を無数の蟲が這うような恐ろしい殺気を感じ取ったリークは絶句してしまった。
この場を最も適切な表現で表すならば、ゴゴゴと効果音がしているような状況だろう。

『クリス中尉の後ろになんか居るんですけど！？まさか、スタープラt・・・！！？』

「ストーップ！その先は著作権に引っかかって作者の命に拘わるから！！」

「ハハハ、リーク少尉は面白い人ですね！星プラチナが実在すると

でもー？」

ミナトとタケルが笑いながらリークの言おうとした事を塞いだ。
・・・目だけは笑ってなかったが。

『いや、なんか半透明だし！？っていうか作者ってなに！！？』

「リーク・・・漫画とかの読み過ぎだよ？」

「えっ・・・と・・・・・・あぅ・・・」

男二人にツッコミ続けているリークに、ミズキが哀れな人を見るようにリークに言う。
その横では、口を開こうとして恥ずかしくなったのかイザベラが口を閉ざす。

「サヤカ・・・ねぇ、サヤカ・・・？」

サヤカの袖を引っ張り上目遣いのイザベラが口を開く。
その姿は身長差もあるので義理の姉と妹に見えなくも無かった。

「ベル可愛い～！やっぱ私の嫁決定ね！？このままお持ち帰りして

いい？って・・・あれ？どうしたのクリス？なんか肩が震えてるよ？寒いの？冷え性だっけ？？」

「むぎゅ・・・っ、サヤカ苦しいって・・・っ」

ぎゅっと抱きしめられたイザベラが苦しそうに訴える。
その前には阿修羅や羅漢像よりも恐ろしい殺気を放つクリスが肩を震わせている。

「サヤカ・・・？今夜の予定は大丈夫？」

「ちょっ・・・クリス、今夜の予定って！？今更、求愛されても私は受けになれないよ！？っていうか、私には嫁（ベル）が居るからクリスみたいなじゃじゃ馬は要らな～ぃ」

すー・・・っと深く息を吸うクリス。

「誰　が　求　愛　し　と　る　か　ー　！！今日という今日は沈めてやる！！？」

ドタバタはまだ終わらないようだった。

＃8　再開（後書き）

全国のパパさん達も似たような状況を一度は通るらしいですね・・・。

書き終わって気がついたんですが、サヤカのキャラが濃いなぁ・・・。

対照的にイザベラのキャラが薄く・・・なりすぎてるようで怖い。

元々、対照的に位置付ける気だったので成功と言えば成功なんですが。

空気にならないように気をつけなきゃ；＞ｗ＜

暇があればこのまま連続で次話を書こうと思います・ｘ・

#9　襲撃（前書き）

・・・何故長くなったし（。д。；）

すみません、８話を書いてる時間より早かったのに文章量が多いです。

#9　襲撃

相変わらず、クリスの背後には半透明なスタ〇ドが出現している。
ゴゴゴゴ・・・という謎の効果音と引き連れて。

「ちょっ、クリスさん？あなたみたいな淑女がそんな物騒な能力まで出すなんてっ！頭まで脳筋になったのかし・・・らっ！？な、なーんてねっ！・・・あ、嘘ウソうそだってば！！？ヤッバ・・・こっちも本気で行かないと殺られる！？」

「そこに居直れぇえええええええええ！！」

ヒートアップするクリスとサヤカを尻目に、会話が紡がれる。

『絶対にあれ、ス〇ンドですよね！？時とか止めるんでしょう！？』

「ハハハ、まさか！飛んできた銃弾とかを指で摘んだりする程度だって」

「うむ、連続して殴り続ける時に言葉の暴力も飛んでくるだけだ」

ミナトとタケルが仕方が無いなぁ・・・と言わんばかりに言葉を返す。

（どうみてもＪ○ＪＯに出てくるような能力じゃないですか・・・）

「ええぃ！逃ぃげぇるぅなぁあああああ！！富士の樹海に埋めてくれるぅぅぅうっ！！」

リークの研究区画となるはずの床が、壁が抉れていくのを嘆きながら、リークがそんな事を考えていると、タカヤナギ中将が感心して言った。

「ほぅ・・・ＪＯＪ○なんて古い漫画を良く知っているじゃないか？１世紀以上昔の漫画だろう」

「だからソレ、直撃したらミンチになっちゃうってば！？えっ、今夜はハンバーグ？今夜は頑張っちゃうぞぅ・・・ってそんな事言ってる暇ないしっ！？いや、待って！本当に死んじゃう！死んじゃうってば！！？」

『・・・！？心を読まんでくださいっ』

（タカヤナギ中将は政治的に成り上がったと聞いているが、心を読む力・・・テレパシーでも持ってるんですかね？）

「まぁ、概ねそんなところだな」

相変わらずタカヤナギ中将は、心を読んで返事を返している。
だが・・・彼は大事なことを失念している。

『・・・はぁ、でも中将？人の心に答えを返すと・・・』

「パパがテレパシストだって分かってるけど、独り言みたいでキモい」

そう、心で思ったことに返事を返せば・・・他人から見た場合は独り言にしか思えない。愛娘から言われた『キモい』という言葉は中将のガラスのハートを崩落させた。

「そう言えばリーク・・・漫画オタク、休日は昔のアニメとか漫画を読んで時間を潰すの」

「そうなんだ？ここに配属されて半年経つけど、漫画とか読んでる

の見たことないよ？」

ミズキはリークの相手を殆どしてないのだが、思い出してみてもリークが漫画やアニメの類を読んだり見ている時に遭遇したことがない。・・・活動する時間帯が違うのかしらとミズキが思っていると、イザベラが衝撃の告白をした。

「私の・・・初めてのデートは漫画喫茶」

「・・・最低・・・死ねばいいのに」

「ウフフフ・・・？サヤカ、今日こそ覚悟を決めなさい・・・？」

クリスとサヤカの追走劇は終幕が近づいたらしい。リークは頭を抱えた（壁、床・・・設備・・・どうしよう）・・・が、今は自分の好きなアニメや漫画を否定されたので反論を試みる。

『ちょっ、漫画もアニメも良いものですよ！？当時の夢とかが詰まってて良い資料なんですって！！？』

「ちょっ、ちょっとしたお茶目じゃないのっ！ク、クリスぅ？目が怖いよぅ・・・ご、ごめんなさいっ・・・！！誤るから許してぇぇ！！？わっ、私まだ死にたくない！！」

「昔の夢を追っかけてる漫画オタク・アニメオタクが軍の技術将校に・・・ねぇ？」

しかし、リークの反論も虚しく・・・同意は得られなかった。
一方でクリスがサヤカの処刑宣告を言い渡す。

「サヤカ・・・３択よ？選びなさい１、挽肉パーティー　２、１０時間耐久の説教地獄　３、今まで溜め込んだ始末書と報告書の処理４年分」

「おまけにミリオタ・・・？キモッ！うわぁ・・・鳥肌立ったよ！」

「ぅ・・・弁解の余地が無いかも」

『あんたら・・・人の事をボロクソに言いますね・・・』

「１は死んじゃうから論外として、２はもう二度と嫌ぁぁぁぁぁぁ！！？・・・さ、３は考えたくもないわ・・・っていうか４年分よ？何百枚あると思ってるのよ！！？」

視界の隅っこにタカヤナギ中将が膝を抱えて泣いている。リークも

隅っこで膝を抱えて泣きたかったが、彼の場合はポットの中で身動きが取れなかった。・・・一方、クリスの3択は強制で2か3を選ばせる代物だった。サヤカは2を既に経験したことがあるらしく、トラウマとなっているようだ。

「・・・でも、リークは良く頭を撫でてくれたよ」

「ベルの頭は撫でたくなるからなー」

「うむ、自分に子供が出来たらベルのような子供になって欲しいものだな」

西欧の血が多い割にイザベラは背が低い。・・・スタイルは良いのだが。
故に、背伸びをしているような可愛らしさが幼さを強くしてしまうのだ。
イザベルの発言にミナトとタケルが同意する。

「ちょっと！私だって、もう大人だよ？・・・子供扱いしないでよっ」

「ベルちゃんは・・・サヤカさんじゃないけど抱きしめ心地が良いですよね」

「あっ・・・あぅ・・・止めてよー」

セツナに後ろから抱きしめられたイザベラは恥ずかしそうに顔を染めるが、安心したように笑みを浮かべてセツナに笑いかける。セツナはニコニコと笑みを浮かべたまま満足そうに抱きしめ続けている。

「・・・ふぅ、癒された」

『・・・確かに、美少女と美女の抱き合って笑う姿はイイですね』

「セツナの髪が母親似だったら、まるで親子だな・・・あぁ悪い、なんでもない」

「馬鹿ばっか・・・これだから男は・・・って、あれ？」

抱きしめられて赤くなるイザベラと笑顔で抱きしめるセツナを見て、癒された男共にミズキは呆れて冷たい視線を向ける。・・・そこで気がついた。

『どうしました・・・ミズキ？』

「うん・・・今更なんだけど、イザベラさんって第二世代？」

ミズキ達、第二世代の親達（タカヤナギ中将など）は第一世代・・・つまり、国によって生み出された能力者達の初期ロットである。初期ロットを元に能力の拡張性や力を増したのが第二世代と呼ばれる第二期ロットである。噂では未だ非公式ではあるが、国が第三期の開発を始めているという話が出てきている。

「皆みたいにベルって呼んで欲しいかも・・・私も一応は第二世代です」

「うん、分かった・・・一応？」

「えっとですね・・・ベルちゃんは私達と同じ第二世代なんですけど、第三世代のプロトタイプでもあるんです」

「具体的には皆と何も変わらないよ？・・・違うのは、チップとナノマシンの有無」

説明をしながらイザベラは自分の眼を指差した。イザベラの眼の奥（視神経などの近く）には、体中のナノマシンを統括するバイオチップが埋め込まれているらしい。

「・・・チップ？眼の中にあるの？」

「第三世代は五感が感じ取る刺激をバイオチップが脳と共有して、体中で活動するナノマシンに指示を出すらしい・・・私のナノマシンは試験段階だけど、端末が無くても端子で接続出来れば操作なんかが考えるだけで出来る・・・らしい」

「・・・ら、らしいばっかりだね」

「え・・・えと、私も詳しいことは分からないし・・・試したくても対応している端末が存在しないから、試せないの・・・」

「本来、第三世代の事はトップシークレットだからな・・・国内であっても、情報規制はするのが当たり前だろう。・・・なんだ？ミズキ、なんか点滅してるぞ」

リークの医療ポットのディスプレイが点滅している。
タカヤナギ中将が指摘すると、首を傾げたミズキが様子を見に行く。

「識別ＩＤが該当しない人間が当施設に複数入り込んだみたい。・・・襲撃？」

「釣れたくまー」

「パパ・・・キモいから。首でも釣って死ぬといいよ？・・・っていうか釣れたって何？」

点滅していたのは施設内の識別ＩＤ不一致エラーだったようだ。事前に識別ＩＤは登録するので、侵入しない限りエラーは出ない。

「ふはは・・・！偉大なパパの策に馬鹿が引っかかったのだよ」

『中将・・・御自分で偉大な・・・とは言わないほうが・・・』

自分で偉大な～とか言う中将に対して呆れたリークに、クリスが疲れたように答えた。

「アレは中将の病気だから諦めなさい・・・ミズキ、敵は何人か分かる？」

「うん・・・《シェオル》検索開始」

『了解しました。――――検索対象、識別コードに該当しない武装集団。――――３２』

《シェオル》が操作する監視カメラの映像では、重火器で武装した装甲兵が写った。
妙だ・・・とミズキやクリスは思った。（こんな、ただの研究施設に武装した装甲兵が制圧しようとしている？）

「奴らを排除・・・生死は問わないっていうか逃がさなければ良い」

「・・・施設の使用レベルは？」

「うーん・・・逃げられると面倒だからなぁ・・・レベル３で？」

レベル３――――施設内の迎撃システムから照明までの殆どを許可された。
余程、パパは彼らに逃げられるとマズイみたいだった。

「《シェオル》当施設の使用許可が出たの・・・レベル３で掌握して？」

『レベル３権限よりシステム掌握開始します――――４５％・・・９７％・・・完了しました』

「相変わらず・・・でたらめな能力よね・・・」

「ミズキとトウヤに何回、命を助けられたか分からないからねぇ」

もの凄い速さで施設のシステムを掌握するミズキにクリスとミナトが呆れる。

「《シェオル》誘い込んでから隔壁を降ろして、脱出経路を全部潰して」

『了解しました。――――誘導を開始します』

こうして、謎の武装集団にとっての悪夢が始まった。

#9　襲撃（後書き）

次回は戦闘というかカオスになると思います・ｘ・；
装甲兵の皆さんのご冥福をｒｙ

えっ・・・サヤカの選んだ選択？
＼　チーン　／

#10　強襲（前編）（前書き）

どうも！深夜からこんばんわミ＿＾ω＾＿ノ
Ｇｌｏｒｉａの中の人です。

今日は戦闘だよ！

#10　強襲（前編）

ミズキ達が騒いでいる時、研究所から少し離れた森の中では――――肉体を改造された強化歩兵だからこそ、運用が可能になった機動強襲装甲服（ヴェロシティ）が３２機・・・並んでいた。

機動強襲装甲服（ヴェロシティ）・・・『服』と称されているが、基本的な設計としては全長４ｍ程の装甲服のコクピットに、人が納まる形を採っている。・・・簡単に想像するなら、ガ〇ダム等が小さくなった機動兵器を連想して頂ければ良い。

最もエネルギーはガソリンとバッテリーによるハイブリット形式で、高速移動時にはジェット燃料を用いた機構が展開する。操縦系統は、コクピットに収まった操縦者（オペレーター）の動かす手足にセンサーが反応して機体を動かすように出来ているので、子供であっても数時間の演習によって操縦が可能になる。

（Ｓｃｈｏｏｌの高学年時で行われる実践訓練にも使用される）

《ヴェロシティ》は子供であっても操縦することが出来る・・・が、例え肉体を改造された強化歩兵であっても、高出力にカスタマイズされていく過程で《ヴェロシティ》のランク分け（ＳＳ、Ｓ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ）がされる。衝撃に対する耐性などが上がっても、結局はオペレーター次第なのである。

戦闘屋の彼らには、高出力にカスタマイズされた機体の使用を許可されている。
それも、Ａクラスヴェロシティのペイントが施された機体・・・オペレーター達も凄腕が集まっているようだ。

「こちらα《アルファ》リーダー、繰り返すこちらαリーダー・・・先遣部隊の展開が完了したら連絡を密に――――」

静けさの中に無線の声が響く。

「β《ベータ》リーダーよりαリーダー・・・こちらは展開完了した――――指示をくれ」

「γ《ガンマ》リーダーよりαリーダー・・・こちらの準備に９０秒程かかる――――」

「δ《デルタ》リーダーよりαリーダー・・・展開まで後３０秒」

どうやらαリーダーが総指揮でα、β、γ、δの４部隊があるようだ。
それぞれリーダーが班の隊長を勤め、隊長達にαリーダーが指示を

出している。

「αリーダーからβ、γ、δリーダー・・・準備が整い次第、作戦を開始する。現場の指揮はβリーダーが執れ」

「β了解」

「δ了解」

「γ了解・・・遅れてすまない、展開完了した――」

そして彼らの作戦が開始される――目標はミズキ達の居る研究所。

「αリーダーより全機――作戦開始」

αリーダーの合図でβ、γ、δの3部隊が移動を開始した。
3部隊の《ヴェロシティ》24機がスラスターを展開し、所定の位置に着く。

「こちらβ――目標施設の前に到達・・・γ、セキュリティを潰せ」

「γより全機――今から３０秒後にＥＣＭ《電子妨害装置》を発動する」

γはサポート役の部隊のようだ。
準備に時間が掛かったのも、機材の用意に手間が掛かったからだろう。
ちなみに、ＥＣＭとはレーダー等を使用不能にする非攻撃兵器である。

「β了解――γのＥＣＭ発動後、δと共に突入する」

「γより全機――ＥＣＭの有効時間は3分間だ。１０秒前・・・９、８」

「こちらβリーダー・・・δ、突っ込むぞ」

「δ了解、βに先導は任せる」

どうやら軽装の強襲型がβ、重装の制圧型がδのようだ。
それぞれ装備が異なるようで軽装のβはバックパックとスラスターが大きく、武装も《ヴェロシティ》用のサブマシンガンとショットガンを装備している。両腕には白兵戦用の高振動ヒートブレードが

それぞれ1本ずつ格納されている。

重装のδは大型の盾が印象的で、盾の後ろには《ヴェロシティ》用のアサルトライフルが格納されている、右肩には短銃身のレールガンが装着されている。白兵戦用の武器は無いが、強いて言えば盾を構えてスラスターをフルスロットルにする事で体当たりが出来る。

「6・・・5・・・・」

「こちらβリーダー、δの野郎共は遅れんじゃねぇぞ、着いて来い！β、δ、突貫する！！」

「・・・1・・・・発動！」

発動したECMにより電子機器が一時的に妨害され、無線やレーダー等が使えなくなった。

βとδが同時に動き出した。展開しておいたスラスターから莫大な熱の奔流が迸る・・・16機の《ヴェロシティ》が編隊を組み、一斉にフルスロットルで突貫する姿は圧巻である。

「こちらγリーダー・・・ECM停止――――無線封鎖を終了、そち

らに合流する」

突入組みのβ、δが到着したのを確認したγがＥＣＭを止め、無線封鎖を解除した。
無線封鎖が解除された事で、先行したβ、δから報告が送られてくる。

「βリーダーよりαリーダー、――――予定通りロビーを制圧完了・・・だが、妙だ」

「こちらαリーダー・・・βリーダー、妙とは？」

制圧完了の知らせを聞いたαリーダーは、更にβリーダーの報告を促した。
すると、βリーダーが詳細を話し出す。

「ＥＣＭに乗じてδと共に突入、目標施設のロビーを制圧しましたが、警備が誰も居ません」

（警備が居ない――――事前に強襲を知られたのか？）
αリーダーは強襲が罠の可能性を考慮しつつ、機材の不具合をγに確認した。

「・・・γリーダー、ＥＣＭは作動したんだな？」

「こちらγリーダー、無線封鎖と共にレーダーが使用不能になったのを確認しています・・・ＥＣＭは作動しました」

ＥＣＭの特徴として、使っている側にもレーダー等が使えなくなるデメリットがある。
しかし、このデメリットは有視界戦闘時に於いてはデメリットをメリットが上回る。
つまり、防衛している側に不意打ちを与えやすいのだ。当然、本来は防衛側が有利なので、ＥＣＭを使った敵側の混乱と、それに伴う強襲の組み合わせは凶悪である。

「αリーダーよりβ、γ、δリーダー・・・αも目標施設へ向かう、β、γ、δは逃げ道を塞げ・・・ねずみ１匹逃がすなよ？それまで警戒しつつ、作戦を続行せよ」

「β了解」

「γ了解」

「δ了解」

αが到着するまでの短い時間だが、制圧した研究所のロビーの一角にてβの《ヴェロシティ》達が、警戒しながら研究所の警備から職員に至るまでが誰一人として見当たらない事について雑談をしていた。

「静かだ・・・警備が居ないのは措いといて、職員すら居ないのが不気味過ぎるな」

「隊長、ここは魔女の館ですぜ？殺人人形に注意しないと首が飛ぶぜ」

βリーダーに向かって部下の一人が笑いかけると、同意を示すように・・・不安を掻き消し去りたいかのように、大きな声で笑うものまで出始める。

「ははは！・・・間違いねぇな」

「β－2、β－4・・・私語を慎め、作戦中だぞ」

βリーダーは作戦中だと言う事と、敵陣の中だと言う事もあり、念を推して注意した。

「でも隊長・・・さっきからセキュリティトラップの類も停止して動いてないぜ？」

「それは俺も気になった・・・だが、ＥＣＭの影響は考えられないか？」

（そうだ・・・警備が居なくとも、セキュリティトラップすら動かないのは奇妙だ）

「こちらγリーダー、αと共に目標地点に到着した。後、ＥＣＭは停止している・・・セキュリティトラップも活動を再開している筈だ」

α、γが到着したらしい、新たに１６機の《ヴェロシティ》が加わり３２機が揃う。

「こちらδリーダー、トラップが発動しないぞ？」

δに慢心からセキュリティトラップに引っかかったと思われた機体があったようだが、トラップが起動していないのか発動しなかったと報告が出てくる。

「こちらαリーダー、トラップが停止しているなら都合が良い・・・

そのまま制圧するぞ」

生きている筈のトラップが作動しないことを都合が良いと言う指揮官の指示に、不安を感じたβリーダーも渋々と了解の意を伝える。

「・・・β了解」

「γ了解」

「δ了解」

「こちらγリーダー、発動しねぇセントリーガンなんて・・・間抜けなモン初めて見たぜ」

「こちらβリーダー・・・俺達、誘い込まれてんじゃねぇか？」

βリーダーの通信が終わり、α、β、γ、δの４部隊が研究所の奥へと移動した後、彼らに知られること無く、ロビー入り口の隔壁が音も無く閉じた。―――狩りが始まる。

#１０　強襲（前編）（後書き）

戦闘だー！とか言っといてゴメンナサイ
敵側から書きたくなったので、こうなりました＞＜

さてさて、明日も更新出来るのかなぁ・・・
期待しないで待っててね！

#１０　強襲の舞台裏（後編・・・？）（前書き）

どうもＧｌｏｒｉａの中身ですっグミッ―'ω'―三―'ω'―グミッ

最初に言っておきます。・・・何故、こうなったし。

＃１０　強襲の舞台裏（後編・・・？）

セキュリティが敵を感知してから数分・・・。
警備や職員をシェルターに避難させたミズキは、衛星からの情報をチェックしていた。

「ひー、ふー、みー・・・《ヴェロシティ》がいっぱい居るねー？」

「Ａクラスヴェロシティか・・・まぁ０４か０５って処だろうな」

０４か０５・・・つまり、ＰＳｉ特務０４（０５）小隊のことだろうとミナトが言った。
《ヴェロシティ》のランクを見れば大体の所属が判別出来るのだ。

「ふむ、統制が取れている・・・錬度も大したものだ」

「餌が大物だから大物が釣れるだろう・・・ただ、針が物騒過ぎて獲物が死なないことを祈る」

タケルが総評を下し、タカヤナギ中将が遠まわしに生け捕りにしろ

と言っている。

「はいはい、中将は大物ですねー。敵対派閥かなんかですか？」

「《ヴェロシティ》の正式採用の時に潰した派閥の残党だよ」

「陸戦隊の主力だった戦車から《ヴェロシティ》への転換期ですか、そんな昔の派閥の残党にこんな力がありますかね？」

中将の発言を、クリスが適当に流しながら確認を取る。
第一世代から第二世代へ移って２０年近くが経つが、《ヴェロシティ》が正式に配属されたのは大戦末期のことである。・・・つまり、数年前ということになる。

「あるだろうさ・・・敵のリーダーが優秀だからな」

「優秀って・・・敵と知り合いなんですか！？」

「いや、私の片腕の一人だ」

「・・・か、片腕ってスパイですか？」

「派閥を潰す事を決めたときに異動させたのだよ・・・5年ぐらい前になるか？」

「5年って!?・・・寝返って二重スパイになってる可能性はないんですか？」

と、驚くクリス・・・5年も敵対派閥の中で地位を築きながら、信用も得て、情が移って二重スパイになっている可能性が無い訳ではないと判断する方が正しい。

「それはありえんな・・・というか、今現在も無線が流れてくるからな」

「中将・・・潰す時には潰しきって下さいよ・・・・」

「うちの派閥は強引に急成長させたからな・・・この手の輩は絶対に出てくる」

「なら、見せしめとして派手に潰せば良かったじゃないですか」

どうせ出てくるのなら、派手に粛清しておけば敵対する派閥も大人しくなるとクリスは言った。それに対してタカヤナギ中将は声を上

げて笑う。

「ははは っ・・・どうせなら中立を謳っていながら、隙を探ってる輩も纏めて始末したいと思ってるだけだよ。だからこそ潰した派閥の残党も残したし、派閥争いで尻尾を出さなかった連中も潰さなかった」

「政治・・・というより粛清ですか」

「まぁ・・・泳がせて置けば、良からぬ事を企んでいる奴らが勝手に集まりだすからな」

用意周到なタカヤナギ中将に、言葉を失う娘の図が出来上がった。

「パパ・・・本当に性格悪いね・・・？本当に死ねば良いのに」

「中将ですものね・・・」

「腹黒だしな」

「腹・・・黒・・・」

「うむ、腹黒なのは間違いないな」

「ミズキ先輩が可哀想ですよ・・・」

・・・と、順にミズキ、クリス、ミナト、イザベラ、タケル、セツナが同意を示す

「ま、まぁ、君達を０１に纏めたのも色々思惑があったのだよ・・・戦歴を偽造したり、出身地を誤魔化したり苦労が絶えなかったがね」

『・・・・そういえば、そんな事もありましたね』

誤魔化すタカヤナギ中将に、０１小隊の彼女らが遠い眼をしているとセツナの声が響く。

「あ、お話中にごめんなさいね？お茶が入りましたよー」

どうやら同意を示した時から、お盆を持ってタイミングを計っていたようだ。
お盆の上には御茶と茶請けのカリントウが入っている。

「おぉ・・・セツナ君は本当に良いお嫁さんになれそうだね」

「中将、風穴開けるぞ」

誰かと言うまでも無くシスコンのミナトが中将を威嚇する。

「ふぅ・・・このお茶、美味しいわね。あっ、このカリントウも美味しい！」

「なにか・・・忘れて・・・る？」

「なんだっけ？」

「あれ・・・そういえばサヤカの姿が見えないけど？」

「あぁ・・・サヤカなら、もう迎撃に出たわよ」

「迎撃って・・・あぁ、襲撃されてたんだっけ？」

「ちょっと！忘れてたの！？」

ほのぼのと会話が弾む内に、お茶まで飲んでいた為か自分達が襲撃されていることを忘れていたＰＳｉ特務０１小隊の面々だった。・・・隊長のクリスは忘れていなかったようだが。

「ふむ、敵は全部でα～δの４部隊で分散する・・・サヤカ君だけでは手が足りんな」

「え～、私はパスしたいんだけど・・・サヤカを追っかけて疲れちゃった」

・・・責任を感じさせない一応、隊長のクリスだった。

「パパ、セキュリティトラップを起動させようか？」

「ミズキ、俺とタケルが出るよ」

「私・・・出る？」

クリスの暗黙の了解からミナトとタケル、イザベラが迎撃に回るか尋ねる。

「ベル、行きたい？リークさんと話したいなら私が出るよ？」

流石に会ったのだから話したいだろうと、空気を読むクリスだったがイザベラは断った。

「ううん、リーク達の護衛任務なら話はいつでも出来る・・・クリスは中将達をお願い」

「うん、分かった・・・サヤカ聞こえる？それじゃ迎撃にミナト、タケル、ベルの3人を回すね」

すると、既に迎撃に向かっているサヤカから不満の声が上がった。

「えぇ～、折角のストレス解消なのにぃ・・・Aランクヴェロシティが8機でしょ？一人でも良いのにっていうか、物足りないかもしれないじゃないの」

そう、上位の特務隊が操る《ヴェロシティ》のランクは大抵がAランクである。
そのAランクヴェロシティ8機を相手に物足りないというサヤカ。

「不満があるなら中将の片腕さんを恨みなさい・・・各個撃破し易いように分散させてくれたんだから・・・まぁ、Aクラスヴェロシ

ティ相手なら余計なお世話なのは同感ね」

そう・・・彼女達ＰＳｉ特務０１小隊の前身は、大戦時に暗躍したＸＸ小隊（公式には存在しない暗部）であり・・・Ｓｃｈｏｏｌでの最高傑作と称された天才達を集めて作られた小隊であった。現在は『発足したばかりの錬度の低い、能力だけが高いエリート集団』だという事になっている。

大戦末期から投入された《ヴェロシティ》にはランクが付けられているが、
彼ら、彼女らが操る《ヴェロシティ》のランクは全てがＳランクである。

「それじゃミズキ～～！一足先に戦闘に入るから、サポートよろしくねっ」

「うん、サヤカ達なら大丈夫だと思うけど気をつけてね？・・・サヤカ、前方２５ｍ先の通路を左に曲がった先の広場で迎撃準備をお願い・・・そこに誘い込むね？」

昔から―――大戦時にもミズキはサポート役をしてきた。ミズキ専用の《ヴェロシティ》も存在するのだが、こちらは“既に存在しない”事になっている。

「了解・・・さて、久々の戦闘を楽しまなくっちゃ」

「広場に熱源ダミーを展開・・・うん、敵も気が付いたみたい。そっちに移動してる」

「うん、レーダーに《ヴェロシティ》が８機・・・中将、質問なんだけど」

「うん？・・・どうした、何か問題があったかね？」

「ううん、久々に私のヴェロちゃんを戦闘に出すんだけど・・・どこまで使って良いの？」

久々の戦闘――――大戦が終わってからは、国内での派閥争いに駆り出されただけである。

――――それも、結局は戦闘活動が無いままに終わった。

「ふはははっ・・・なんだそんな事か、武装は軽装のままか？」

「流石に重装は必要ないっしょ？」

戦時中でもないのに重装は必要無いので当然、軽装のままだと中将

に答える。
すると、中将は思い出すようにして次第に笑みを浮かべていく。
「そうか、君は確か白兵戦の名手だったな・・・何が使いたい？」
「えへへっ・・・薙刀が使いた～い」
「中将・・・俺はハンドガンで良いか？流石に屋内だとライフルは無理だろうし」
「敵は８機・・・俺も主武装の小太刀を使わせて貰う」
「私は・・・パイルバンカー・・・でいい」
それぞれが、それぞれの主武装の希望を述べる。
彼ら―――彼女らは戦闘のプロである。
唯一の心配は新人として配属されたイザベラである。
彼女の操る《ヴェロシティ》もＳランクであり、彼女自身もＳランクの凄腕であるが、幼い外見や選択した主武装の特異さから心配無いと分かっていても心配になってしまう。

「・・・よし、許可する。存分に暴れてきなさい」

『了解』

「狩りの時間が始まるよっ・・・！お先に戦闘開始っ！！」

叫ぶようにしてサヤカの《ヴェロシティ》がδへ狙いを定め、襲い掛かった。

#１０　強襲の舞台裏（後編・・・？）（後書き）

戦闘だよ！・・・と言いつつ、何故こうなったし。
次こそは戦闘開始ですよ！っていうか戦闘以外書けないよっ！！
更新できそーなら明日も頑張ってみますが、期待しないでくださいね・ｘ・；

#11　能力―サヤカ編（前書き）

こんにちわ！Ｇｌｏｒｉａの中身です―'∀'―ノ
平日だって？私の心では毎日が日曜日だぜ＞＜

・・・嘘ですｏｒｚ
今回はサヤカさんのバケモノっぷりにズームインですよ・ｘ・

#11　能力ーサヤカ編

彼らがソレに気が付いたのは当然だった。
レーダーや熱源探知（サーモグラフィ）に引っかかったからである。

しかし、何も無い開けた場所の中央に巨大な熱量がいきなり発生するものなのだろうか？
δリーダーは先行していた部下を一旦下がらせ、サポート役のγに応援を要請した。

「δリーダーよりγへ・・・・迎撃に上がってきた《ヴェロシティ》は出てきたか？」

「・・・隊長、反応がないっすね」

「繰り返す・・・こちらδリーダー、γ応答しろ！」

無線からは壊れたようなノイズが走っている。
（―――応答が無い、γがやられた？）

「こちらδリーダー、誰か応答しろ！！」

「隊長、新たに熱源反応１・・・あれ、熱源が消失？なんだこれ！！？」

隊内のサポート要員であるδ－８が何か喚いている。

「落ち着けδ－８、状況を説明しろ」

「先ほどから反応していた熱源が更に１つ増えて、両方とも消えました！」

（熱源が増えて消えた・・・ダミーか？）

「δ－８、ダミーの可能性は無いか？・・・それとも迎撃の《ヴェロシティ》か？」

「現時点では区別出来ません・・・後、区画を断絶するようにＥＣＭが作動しています」

「ＥＣＭが？・・・無線がこうして使えているじゃないか」

「し、信じられませんが、区画内の識別コード以外の無線をジャミングしています」

「やれやれ、誘い込まれて罠でしたっと・・・仕方が無いなδ全機、熱源があった広場まで盾を構えて突っ込むぞ？δ－2は俺の後ろ、δ－8はδ－2の後ろに付け、δ－3・4・5・6はそれぞれ左右に、δ－7は殿を頼む・・・カウントは3秒だ」

『Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ』

「虎穴に入らずんば虎子を得ずだ。・・・3、2、1、突撃！」

一方でサヤカは非常にイライラしていた。

「むー・・・ミズキ・・・来ない、来ないよぅ・・・まだー？」

サヤカが不満を垂れ流して暇つぶしをしていると、突入後に散開して別々に行動を始めた敵部隊の動きが完全に止まった。・・・用心深い。

「うーん・・・こっちのＥＣＭにも感づいたみたい、どの部隊も様子を窺ってるかも？」

獲物が来ない・・・熱源に誘われて近くまで来ているとミズキから連絡が着たが、どうやら通路の曲がり角付近で止まったらしい。用心深いのか来る気配が見当たらない。

「獲物なら獲物らしく飛び込んできなさいよー」

「中将の片腕が鍛えたんだ・・・今、迂闊に動いて損害が出ることを避けたんだろう」

「サヤカ・・・待ってれば・・・どうせ向こうから来る」

サヤカの声にタケルが答え、イザベラが悟ったように答える。
確かに待っていれば、向こうから動くしかないのだ。時間は有限であって無限ではない。
襲撃をしかけた方は時間が経過すればするほど立場が悪くなっていく。

「ミズキ？俺は管制棟に来た敵を潰せば良いんだよな？」

（恐らく敵のサポート部隊が、こちらのＥＣＭを潰しにくる・・・。

物理的にミナトが、情報戦では私が居るから大丈夫・・・ベルさんの武器は障害物が多いほうが有利だし、タケルの小太刀は少し広い場所の方が良いかな）

「うん、ミナトはそこでお願い。ベルさんはもう少し先の工業プラントで、タケルは生産プラントの搬入口の前で迎撃して？」

瞬時に判断を下したミズキが指示を出すと、３人から了解の旨が返ってくる。

「了解」

「わか・・・・った」

「了解した」

これで一段落・・・と思った矢先にサヤカの近くに居たグループから高熱反応を感知した。
多分、スラスターを展開して高速移動する事で一気に畳み掛けるつもりだろう。

「あ、サーモに高熱反応多数！・・・サヤカ、来るよっ！！」

「今、見えた・・・狩りの時間が始まるよっ・・・！お先に戦闘開始っ！！」

敵の数は全部で８機・・・レーダーやミズキから送られてきた情報と一致する。
憶測だけども慎重なところをみると馬鹿ではないらしい。突入は散発的ではなく、纏まって確実に制圧しやすいように密集陣形を組んでいるところも好印象だ。

サヤカはにんまりと笑みを浮かべたまま、高鳴る戦意を押さえ込んだ。
彼女の目が普段のふざけたモノから狩人のモノへと変化する。

「スラスター展開、ブースト出力３０％、ミラージュドライブ作動・・・ミズキ、レーダーとかから消えるけど心配しないでね？」

「あぁ・・・うん、分かった。頑張ってね？」

そのままサヤカの反応は消えた。今、彼女がレーダーから反応を消したのはカラクリがある。レーダーからサヤカの《ヴェロシティ》が消えた。彼女のＰＳｉはパイロキネシス・・・熱や炎を操る能力である。炎と言えば通常、焼いたり融かしたり・・・という用途に囚われるが、熱を操作することで大気密度を変化させる事が可能になる。

つまり、大気中の屈折率を変化させて幻覚（蜃気楼）を見せたり・・・大気と大気の間に真空を挟んで音や熱をシャットアウトすることも可能だ。レーダーやサーモグラフィから姿を消すことが出来たのは、この能力を使ったからである。

当然だが普通の能力者では不可能な芸当なので、ミラージュドライブはサヤカの《ヴェロシティ》専用の装備となっている。発火温度から2～3℃単位の微妙な温度操作が出来るサヤカが異常なのだ。

δの《ヴェロシティ》8機は、フルスロットルで熱源の消えた広場に到達した。
レーダーやセンサーは役に立たない・・・多分、特殊な能力を持つ敵なのだろう。

「全機・・・油断するなよ？いつでも迎撃出来るようにしてお・・・」

ザシュッ――――――・・・

軽い・・・砂を撒き散らすような音がして、δリーダーが振り返った先には胴体を輪切りにされた副官の《ヴェロシティ》――――δ－2の姿があった。

「δ－2！クソッ・・・撃つな！同士討ちになりたいのか！！」

サヤカは密集陣形を取っていたδの中心付近――δ－2とδ－8の間に降り立った。そのまま流れるような動きで手にした薙刀を一閃――ワザと一拍空けて敵に姿を確認させた後、文字通り空気の中へ溶けるようにして消えた。

「クソッ・・・悪い夢でも見てるのか！？隊長、敵がまた消えました！！」

発狂したように混乱するδ－8・・・副官の胴体が輪切りにされる場面を一番近くで見てしまった為、次は自分が切り捨てられるのでは？という疑問が頭に浮かんで離れない。

「落ち着けδ－8！・・・敵の位置を探れ！！」

「た、隊長・・・敵、敵が・・・たくさん沸いてきた！」

δリーダーが落ち着いて周りを見渡すと橙色の《ヴェロシティ》が薙刀を構えている。

それも、δの周囲を囲める程の数で――だ。

「馬鹿な・・・ありえない、レーダーに反応はないのか！？」

「レ・・・レーダーに敵影なしっ・・・もうダメだ！！？」

ゆっくりとした太刀筋で、側面を守っていたδ－６が縦に切られ左右に崩れ落ちる。それを見てパニックに陥ったδ－３・４が、周囲の幻覚（蜃気楼）にアサルトライフルの弾をばら撒いた。δリーダーは通路側へ下がるように指示を出した――――

「通路まで下がってδ－５・８はレールガンの準備をしろ！残りは俺と一緒に弾幕を張れ！！」

「Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ」

サヤカの《ヴェロシティ》達が一斉に飛びかかる。
δリーダー達が弾幕を形成するが背後のδ－８、横に居たδ－３・５が纏めて切り捨てられた。

「後ろかぁぁぁあああ！！！」

δリーダーはアサルトライフルを連射したまま、フルオートで背後に叩き込む。

アサルトライフルの弾丸は確実にサヤカの《ヴェロシティ》に当たったと思われた。

弾丸が――――気化しなければ。だがδリーダーは、弾丸がサヤカの《ヴェロシティ》に当たる前に気化している事に気付けない。

「無駄だよ・・・あんた達は良くやったよ？Ａクラスヴェロシティ程度でね」

「お、女ぁ！？」

「恨んでくれて構わないけど、ＡとＳの差・・・というよりはＰＳｉの差かな？を恨みな」

薙刀の刃が一閃され、δリーダーの《ヴェロシティ》が崩れ落ちる。残ったδの隊員達は、盾ごと輪切りにされて切り捨てられた。

パイロキネシスで熱を操作して、薙刀の刃が当たる直前に敵の装甲を溶かしているのだ。
溶けたアイスを包丁で切るようなものだ・・・盾であろうが関係が無かった。

「ミズキ、こっちは終わったよ」

「うん、無事で良かった・・・おつかれさま」

#11　能力―サヤカ編（後書き）

なんというバランスブレイカー・・・。
戦闘が始まるとテンションが低くなるサヤカさんでした・x・

次は週末・・・ぐらいになるのかなぁ？
期待しないでくださいね・x・；

#12　能力―ミナト編（前書き）

遅れました。
Ｇｌｏｒｉａの中の人ですよ！―ω―っ―＝３　ドッコイ
今日はミナト編です・ｘ・

#12　能力―ミナト編

「うん？なんてこった・・・これは気のせいじゃないな」

「・・・まさか、隊長もレーダーが？」

「・・・ってことは、俺の勘違いでも無いんですね」

γリーダーは研究所のＭＡＰを呼び出して面食らった。
副官であるγ―２やγ―３も驚いたような反応をしていた。

「γ―２、γ―３も・・・だったのか？」

「最初は機器の故障か何かだと思ってましたが、他の機器に異常がないので・・・」

「えぇ・・・俺も故障か何かだと思ってて、報告しようとしてたところです」

そう、先ほどからα、β、δのマーカーが消えたままなのだ。ＥＣＭが発動している形跡があるので多分、区画ごとに識別ＩＤ以外をジャミングしているのだろう。だが、今起きたのはマーカーが消えるなどより深刻なものだった。

「流石に機器の故障でレーダーから味方の反応が消えても、隔壁は降りませんからね」

α、β、δと分かれてから数分・・・隔壁が降り、完全に分断された。
合流するためにも、味方をサポートするにも、味方の生存情報を調べるにも、施設のセキュリティなどを管理している管制棟を押さえなければならない。

「・・・分断されたか、γ－２は最後に反応が消えた味方の位置を特定しろ」

「Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ」

数分が経過してγ－２が報告を上げる。

「位置の特定が出来ました・・・α、β、δも完全に誘導されたみたいです」

「仕方が無い、俺達で施設のコントロールを奪うぞ？γ－２は侵入経路、γ－３は念のためにセキュリティトラップをチェックして潰せ・・・管制室に行くぞ、γ－４・５は先導しろγ－６・７は側面を・・・γ－８は殿を頼む」

『Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ』

場面は変わって管制棟には灰色の《ヴェロシティ》が待機していた。もちろん《ヴェロシティ》のオペレーターはミナトである。

「ふぅ・・・ミナト、誘導完了したよ？後、数分で敵の情報戦部隊が向かうと思うから迎撃をお願い・・・管制棟の近くなんだから、なるべく機材とかは壊さないでね？」

「了解っと・・・敵は８機か？」

「うん、装備を見た感じだと・・・護衛の《ヴェロシティ》が５機居るよ」

敵は８機だと聞いていたのだが、戦闘用の護衛機は５機だけらしい。

先程まで暴れていたサヤカが８機で文句を言っていたので、寂しいものがある。

「５機か・・・少ねーなぁ」

「愚痴言わないの、敵がゲートから出てきたら攻撃される前に倒してよ？」

・・・とか思ってたら、ミズキが難易度を上げてきた。

「無茶言うなよ！こっちは武器制限してハンドガンだけなんだぞ！？」

そう、ミナトの武器は銃火器である。本来はライフルからミサイルまでを駆使するのが彼の戦闘スタイルだった。・・・が、管制棟には重要な機材が大量に置いてある。“うっかり”で誤射したら・・・ミズキが笑顔でトラウマを作ってくれるだろう。

「ミナトの場合、ハンドガンでもレールガンでも同じでしょ？」

「おまっ・・・いやまぁ、そうなんだが」

ミナトのＰＳｉ能力はサイコキネシスによるベクトル操作である――正確にはベクトルだけではなく、スカラー量すらも操っているのだが・・・つまり、銃口から出た弾丸は重力などの物理法則に左右されずに文字通り“まっすぐに飛んでいく”

性質が悪いことにミナトの能力は大口径のライフルでも、５０ｉｎｃｈ（インチ）砲でも射撃時の反動を正ベクトルとして捉え、負の成分を発生させる事で衝撃を０にする。つまり、威力に比例する反動を打ち消す事が可能なのだ。

「ぁ・・・うん、敵との遭遇まで約１分・・・大丈夫だと思ってるけど無茶しないでね？」

「無茶言ったり、無茶するなと言ったり・・・お前は本当に分からん奴だよなぁ」

うんざりと愚痴を零す兄に、最愛の妹がエールを送ってくる。

「ミズキ先輩は、兄さんを認めてるから無茶を言うんですよ？」

・・・ちょっとエールと言えるかは微妙であったが。

「ちょっ・・・セツナったら！まぁ、ミナトの能力を知ってるし、

Ｓｈｅ，ｏｌを使った“魔弾”が外れるとも思わないよ？・・・４５秒前」

照れるミズキが言い訳をしながらもカウントを始める。
魔弾―――確かに、ミナトの能力を考えると魔弾と言う表現は正しい。

「ははは っ・・・お前らに言われると、こっちも張り切り甲斐があるってもんだ・・・サヤカも暴れたみたいだし、俺も暴れさせてもらおうかねぇ・・・久々の実戦だしな」

「３０秒前・・・まぁ、強くないみたいだし、期待し過ぎないようにね？」

「関係無い、問題も無い、出てきたら貫けば良いだけだ・・・脚部固定、関節部に対衝撃剤注入開始・・・完了、出力３０％、ミズキのＳｈｅ，ｏｌとのリンク完了、頼むぜ？」

「３・２・１・・・来るよ！」

「Ｓｈｅ，ｏｌの画像処理は良好、目標を捕捉―――ロックオン・・・貫け！」

管制棟までの道のりを、８機の《ヴェロシティ》がスラスターを軽く吹かしながら疾駆する。

「この先のゲートを抜けると管制棟です！」

「良し、γ－４・５は敵の奇襲に気をつけろ！・・・突っ切――――」

γ－１・・・γリーダーが指示を出し終える事は無かった。
フルスロットルにしようとしたのか――――スラスターだけが虚しく開いた・・・が、開かれたスラスターからアフターバーナーが上がることは無く――――先行していたγ－４とγリーダーの《ヴェロシティ》が崩れ落ちる。

「た、隊長！？・・・γ－４！！」

何が起こったのか――――理解出来ない。
γリーダーの《ヴェロシティ》のコクピット部には穴が開いている。銃撃――――？穴の大きさは小火器クラス・・・ハンドガン程度のモノ。サポート用の《ヴェロシティ》とは言え、護衛機を貫通させて装甲の厚いコクピットを打ち抜いた？

副官であったγ－２が混乱する頭を押さえつけ、一瞬で状況を整理

しようとしていると管制棟の方向から拡声器で男の声が流れた。レーダーには機影が1――――隊長達の仇の声

「・・・力の差が分かったか？分かったら武装解除して投降しろ・・・なるべく生かして捕獲しろって言われてるんでな・・・まだ、抵抗するか？」

「貴様ぁぁあああああ！！」

酷く――――傲慢な声だった。力の差を見せ付けるために隊長達を打ち抜いたのか？その上で投降しろと言われている・・・舐められている？――――殺そう。

γ―2が銃口をミナトの《ヴェロシティ》に向け、発砲する――――が、当たらない。

「その射軸なら予測済みだ・・・お前ら本当にAクラスか？力の差があり過ぎる・・・そうか、ハンデとして2丁持ってきたが、片方だけで相手すれば良い勝負になるか？」

「ふっ・・・ふざけるな！！ハンドガンじゃないか！そんなもので俺達を倒すだって・・・？馬鹿にしやがって！！」

良く見れば、ミナトの《ヴェロシティ》が持っていたのは2丁のハンドガンだった。片方から発煙が上がっているのを見ると、片方のハンドガンで護衛機のγ－4を貫通させ、隊長機を打ち抜いたと分かる。――――そして、気が付く・・・本当にハンドガンで？

「さっき1発撃ったから残りは5発・・・だが、予備のマガジンは要らなかったな」

「おい、俺たちの人数と弾の数が合ってねぇぞ？・・・1人は銃すら要らないってか？」

何かが矛盾している。・・・特殊なＰＳｉ能力で銃弾を強化したのか？

――――そもそも銃火器を使用すると言う事は、ＰＳｉ能力が戦闘用に向いて無い事を意味する。何故なら、亜音速で射出される弾丸に能力を付与する事は不可能とされており、ＰＳｉ能力を使う際にも、大半が戦闘を有利になるような使い方をしている。

簡単に言えば、戦闘に特化したＰＳｉ能力を持つ戦闘要員は銃火器を補助として使い、中距離～接近戦でＰＳｉ能力と近接戦闘武器を使って仕留めるのが定石となっている。γ－2は嫌な予感を押し殺して――――湧き上がる殺意をミナトに向けた。

「・・・γ－2から各機、指揮を俺が引き継ぐ！相手が強かろうが1機だ、1対多数なら勝てる！隊長達の仇を討つぞ！！」

『了解！』

「頼むから・・・楽しませてくれよ？」

ミナトは詰まらなさそうに笑うと照準を戦闘の1体に定めた。

「――Ｓｈｅ，ｏｌ、システムをマニュアルから《ブリューナク》に変更」

《ブリューナク》とはサヤカのミラージュドライブと同じように、ミナトの《ヴェロシティ》だけが所有する特殊機能で、ミズキのＳｈｅ，ｏｌを利用することで放たれる弾丸は物理法則に左右されず、銃口を始点・目標を終点とする事で弾丸の軌道を操作することも可能にする。――つまり、ミズキのＳｈｅ，ｏｌに高速演算をさせる事により、本来発生する3次元的な死角を消す機能である。

ミズキ達がミナトの能力を“魔弾”と称するのは、これが原因である。

ちなみに――《ブリューナク》は意外な恩恵を生み出した。

通常、弾丸とは薬莢の中の炸薬が燃焼して発生する推進力を使って射出されるが、その際に弾丸自体に刻まれた溝（スリット）と銃身から銃口にかけて刻まれている溝（スリット）が噛み合うように設計されており、弾丸が銃口から発砲された際に弾丸を回転させている。

この回転が、弾丸をまっすぐ飛ばし、命中精度と威力を高めている。
《ブリューナク》は発砲した際にミナトのベクトル（スカラー量）操作を用いて、射出される弾丸を高速で回転させる事で、通常の射撃と比べて貫通力と破壊力を高めているのだ。

「γ－5・6回り込め！・・・チャフを使って護衛機を援護するぞγ－3！！」

「γ－3了解」

「んー、チャフか・・・意味無いんだけどな」

《ブリューナク》が開放される――――銃口が5回、瞬いた。
次の瞬間には崩れ落ちる5機の《ヴェロシティ》・・・γで残ったのはγ－2だけだった。

「なっ・・・ばっ・・・馬鹿な！？」

「ほら、管制棟だろ？下手に暴れられて機材壊されると怒られるんだわ」

「バケモノ！・・・バケモノめ・・・！！」

γ－２の《ヴェロシティ》が手にしたハンドガンをミナトに向かって連射するが、弾丸の殆どが空中で止まって落ちた。――ガチガチッと乾いた音がする――弾切れ。

「まぁ、そっちも銃弾尽きたみたいだし？投降するなら捕虜として連れて行く――」

「う、うぁぁあああああああああああああああ！！！」

玉砕覚悟とγ－２がヒートナイフを膝から引き抜き、雄叫びを上げてミナトに襲い掛かる。

「コクピットは外す――他の連中は生かして連れて帰ってこないだろうからな」

ミナトは弾の残っているハンドガンの銃口をγ－２に向け、１発の弾丸を放った。
放たれた弾丸は――まっすぐにγ－２の《ヴェロシティ》へと向

かい、最初に左脚部を貫いた。貫いた弾丸は鋭角的に跳ね上がって右上腕部を貫き、左腕部を貫き、独楽のようにクルクルと回る軸となった右脚部を最後に貫いて自由を奪った。

γ―2の《ヴェロシティ》は1発の弾丸の前に崩れ落ちた。

「―――ミナトだ・・・敵のオペレーターを捕獲した」

「ミナト、お疲れ様・・・捕虜にしたの？」

「あぁ、どうせ他の連中は連れて帰らないだろう？―――帰還する」

《ヴェロシティ》のコクピットを開いたミナトは空を仰いだ。
（良い空だ―――だが、人を殺す感情が麻痺した俺には勿体無いな）

そんな事を思った自分に苦笑したミナトは、気絶した《ヴェロシティ》のオペレーターをコクピットから引き釣り出して縛り上げた。
後はテイクアウトするだけか―――

そういえば、ベルは初めての実戦だったな・・・大丈夫だろうか？
そんな事をミナトは考えたが、同僚達の力を思い出して頭を振った。

俺達、バケモノの同僚に選ばれた奴だ――――弱い筈がない

#12　能力―ミナト編（後書き）

活動報告の方に書くと思いますが、鉄鬼が始まっちゃいました・・・。

どうみても次話を書かないで遊んでました　さーせん＞＜

次はフラグが経ったベルこと、イザベラ編にしたいと思います・x・

もう頭の中には構想があるんだよ！

でも、ゲームが私を呼んで・・・ピンポーン

おや？誰か来たよう・・・アッー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2920i/

廻る貴方と―――

2010年10月16日03時35分発行